

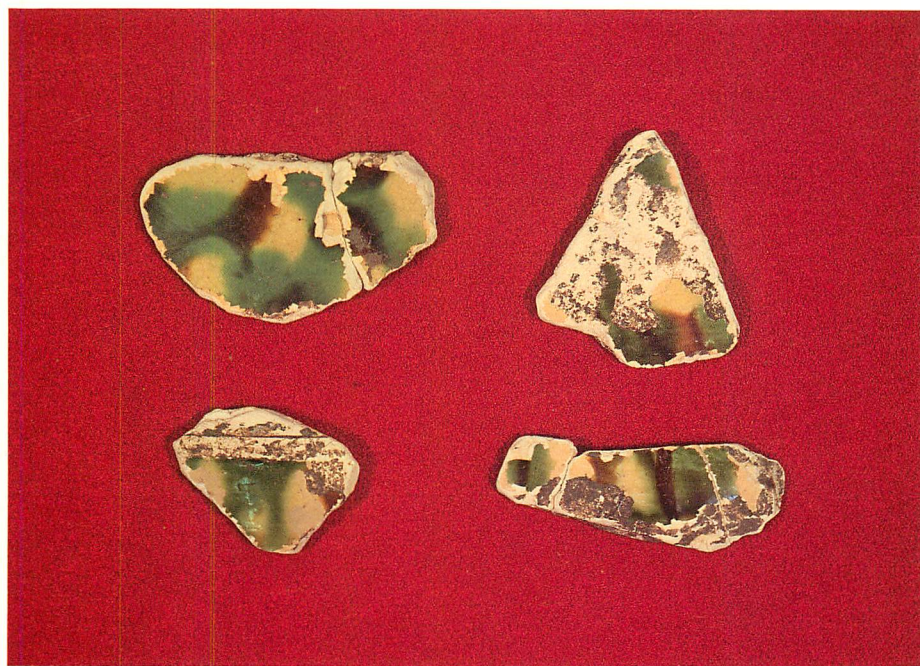
三重県斎宮跡調査事務所年報1980

史 跡 齋 宮 跡

発掘調査概報

昭和56年3月

三重県教育委員会
三重県斎宮跡調査事務所



三彩陶器 第30次調査出土

This is a detailed black and white map of Matsuyama City, Japan. The map shows a dense grid of streets and buildings. Overlaid on the map are red lines and numbers, which likely represent specific areas or routes. The map includes labels for various districts and landmarks, such as '坂本' (Sakamoto) and '金剛坂' (Kongosaka). The map is oriented with North at the top.

桶木町
松阪市

は じ め に

いつかまた^{いつ}齋の宮の^{いつ}齋かれて
注連^{しめ}の御内に塵を払はむ

この歌は、西行法師が「伊勢に齋王おはしまさで年経にけり、齋宮、木立ばかりさか
見えて、ついがきもなきやうになりけるを見て」詠じたものと、山家集下巻に記されてお
ります。

昭和54年3月齋宮跡が国の史跡に指定され、同年4月当調査事務所が現地に設置されて
以来、はや2か年が経過しようとしています。

140ヘクタールという広大な注連の御内において、その学術的な塵払いは、今日までに
約60,000平方メートルに達しますが、全体的には、わずか4パーセントに過ぎず、文献上
齋宮の中核とされている内院・中院は、その位置さえも未だ解明されていないのが現況で
あります。

しかしながら、この2か年の調査の成果は、注連の御内が時代により移行していること、
とりわけ奈良時代は史跡の西側に、平安時代は東側に、それぞれ位置していたことが明確
となってまいりました。

ここにご報告申し上げます昭和55年度の発掘調査は、昭和55年3月策定された「史跡齋
宮跡保存管理計画書」に基づき、昭和57年度において公有化するかしないかを決定する地
区（準公有化地区66ヘクタール）の性格を把握するための調査に主眼をおいて実施したも
のであります。

調査にあたり、種々の有益なご指導を賜った齋宮跡調査指導委員の諸先生をはじめ、文
化庁、明和町の関係機関、さらに快く調査地を提供いただいた地元関係各位に心から感謝
の意を表する次第であります。

最後に、一日もはやく学術的な塵払いを進め、注連の御内に齋の宮が再現できますよう
関係各位の一層のご指導とご協力を念願して、発刊のご挨拶とさせていただきます。

昭和56年3月

三重県齋宮跡調査事務所長

佐々木 宣 明

目 次

I 調査の経過	1
II 第30次調査	3
III 第32次調査	11
IV 第33次調査	19
V 第34次調査	30
VI 第35次調査	39
VII 第31次調査（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）	51
VIII 調査事務所要覧	58

例 言

1. 本書は、三重県斎宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和55年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。
2. 第Ⅶ章は、明和町教育委員会が国庫補助金を受け調査主体となっておこなった現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は斎宮跡調査事務所が担当した。
3. 遺構実測図作製にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の標示は真北（N 5° 40'E）を用いた。
4. 遺構標示記号は次の通りである。
SB; 建物 SK; 土坑 SD; 溝 SE; 井戸 SA; 柵
5. 斎宮跡の調査全般については、元京都大学教授福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞蔵氏、奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏、梶山女学園大学教授久徳高文氏、京都府立大学教授門脇禎二氏、名古屋大学教授榑崎影一氏、皇学館大学助教授渡辺寛氏の指導を得た。
6. 本概報の執筆、編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、佐々木宣明、山沢義貴、大西素行、吉水康夫、倉田直純があたり、野呂美絵子がこれに協力した。

I 調査の経過

史跡斎宮跡の昭和55年度の発掘調査は、計画調査として第30次、第32次、第33次、第34次の面的調査と中町北部のトレンチ調査を実施したほか、明和町教育委員会が調査主体となり三重県斎宮跡調査事務所が発掘調査を担当する個人住宅新築等に伴う現状変更緊急調査をおこなった。調査の期間は、昭和55年5月6日から昭和56年2月17日まで、調査した面積は約9,000㎡である。

計画調査は、昭和54年度に策定された保存管理計画による準公有化地区（C地区）の昭和57年度見直しに対応するため、今年度も、未調査地区の多いC地区を中心に調査地点を選び面調査を実施した。第30次調査は、古里地区南部の竹川字中垣内地内で5月から7月まで実施し、奈良時代と鎌倉時代の各種遺構を検出し三彩陶器片を発見した。第32次調査は、公有化地区（A・B地区）と古里地区の中間部の遺構状況を明らかにするため、公有化地区の最も西側の字塚山地区で、7月から9月まで実施した結果、平安時代前半を除く各期の掘立柱建物と奈良時代の方形周溝等の遺構を検出した。9月から12月にかけては、斎王集落の西側の字篠林地区で第33次調査をおこない、奈良時代から平安時代の掘立柱建物、竪穴住居、井戸等を検出した。第34次調査は12月から2月にかけて実施した。調査地点は中町北部の昨年度のトレンチ調査で大型建物が確認された西加座地区で、平安時代各期の掘立柱建物を多数検出するとともに、200点におよぶ緑釉陶器を発見した。

トレンチによる調査は、中町集落北方の西部と南部については昨年度調査したが、今年度は、未調査地区である中央部と北部について延長約400mを実施した。調査時期は作物の少ない冬期をえらび、第34次調査と平行しておこなった。調査の結果、奈良時代から鎌倉時代にいたる掘立柱建物をはじめ各種遺構が検出されたが、区画を示す溝が多数みつき、しだいに宮城東部の様相が明らかになってきた。

個人住宅新築等に伴う現状変更緊急調査は12件の申請箇所について調査した。調査地点は宮城全体におよぶが、準公有化地区（C地区）で5箇所、準住宅地区（D地区）で6箇所、住宅地区（E地区）で2箇所あり、平均調査面積は約110㎡である。なお、第31—4次調査と第31—10次調査は、調査費原因者負担の調査である。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	地 籍・地 番	所有者	備 考
30	6ABJ-M・X・W	1,470 ㎡	55.5.6～ 55.7.28	明和町竹川字中垣内 382-1他	副田修也	計画的な面調査 C地区
31-1	6ADO-M	64	55.5.10～ 55.5.20	明和町斎宮字内山3038 -13	岩見哲人	個人住宅に伴う 緊急調査D地区
31-2	6ACP-I	24	55.5.21～ 55.5.23	明和町竹川字南裏 227 -2	鈴木正博	個人住宅に伴う 緊急調査D地区
31-3	6ABD-A	54	55.5.24～ 55.6.4	明和町竹川字古里 588 -4	北薮和弘	個人住宅に伴う 緊急調査C地区
31-4	6ADQ-T	444	55.6.9～55.7.16 56.1.28～56.2.6	明和町斎宮字牛葉3018 -2	百五銀行	銀行店舗建設に 伴う緊急調査 D地区
31-5	6ACC-G	192	55.7.28～ 55.8.11	明和町斎宮字塚山3338 -3	水谷明生	個人住宅に伴う 緊急調査C地区
31-6	6ABO-X	204	55.9.17～ 55.10.17	明和町竹川字古里 576 -1	池田幸生	個人住宅に伴う 緊急調査C地区
31-7	6AGI-L	51	55.10.28～ 55.11.17	明和町斎宮字東加座 2427-1	竹内重雄	個人住宅に伴う 緊急調査E地区
31-8	6ACN-G	150	55.12.11～ 55.12.22	明和町斎宮字広頭3388 -1・5・8・9	森 惇	個人住宅に伴う 緊急調査D地区
31-9	6AGD-L	64	56.1.7～ 56.1.16	明和町斎宮字北野2487 -1	中川 司	個人住宅に伴う 緊急調査C地区
31-10	6ADM-O	22	56.1.16 56.1.20	明和町斎宮字内山3043 -3	近畿日本鉄道	プラットホーム 拡張に伴う緊急 調査E地区
31-11	6ADT-I	6	56.2.9	明和町斎宮字木葉山 304-2	澄野広作	個人住宅に伴う 緊急調査D地区
31-12	6ADT-J	6	56.2.9	明和町斎宮字木葉山 304-7	宇田定男	個人住宅に伴う 緊急調査D地区
32	6ACE-D・E・F	1,150	55.7.29～ 55.9.18	明和町斎宮字塚山3347 他	明 和 町	計画的な面調査 A・B地区
33	6ADE-C・D他	2,450	55.9.16～ 55.12.7	明和町斎宮字篠林3161 他	中西久郎他	計画的な面調査 C地区
34	6AFK-F・G・H	1,080	55.12.10～ 56.2.17	明和町斎宮字西加座 2725他	山路和生他	計画的な面調査 C地区
35	6APE他	1,550	55.12.10～ 56.2.17	明和町斎宮字西前沖 2633他	岡田 隆他	計画的なトレンチ 調査C地区

第1表 昭和55年度発掘調査地区一覧表

II 第 30 次 調 査

6 ABJ—M・W・X（中垣内地区）

本調査区は「史跡斎宮跡」の所在を追求する範囲確認調査を実施する端緒ともなった古里B地区の南約 200m に位置し、地番は明和町竹川字中垣内 382—1 他である。

これまで付近で行なつた発掘調査には古里地区の調査のほか、県道南藤原・竹川線を挟んで東 100m で昨年実施した第27次調査（東裏地区）などの面調査や、町道新設・個人住宅新築等に伴って実施した小規模なトレンチ調査数ヶ所などがある。

今回斎宮跡西部の遺構の広がり、古里地区との関連等を知るために調査を実施した。その結果竪穴住居15棟、掘立柱建物5棟、土坑15ヶ所のほか井戸、柵（？）や多条の溝等多くの遺構を検出し、その大半が奈良時代と鎌倉時代のものであった。

（I）弥生時代の遺構

一部で奈良時代の竪穴住居が重なるが、直径約 5.8m の円形を呈する竪穴住居（S B 1653）1 棟を調査区北東隅で検出した。埋没土中より出土した土器片から弥生時代中期の竪穴住居であると考えられる。同様の時期の竪穴住居は古里C 地区でも検出されているほか弥生時代中期の土器片は古里の各地区で出土している。

古里地区を中心とした台地西辺に立地する弥生時代集落が当地区付近まで広がっていたものであるといえよう。

（II）飛鳥時代の遺構

調査区北西隅で検出した方形の竪穴住居（S B 1615）1 棟がある。一部調査区外にのびるため全容は不明であるが、長辺約 8 m、短辺 5 m の方形を呈する。部分的に途切れる周溝をもち、東壁にカマドを有する。カマド中央には平底筒型の土器を倒立させた支柱を検出した。

付近は地山に礫が露頭し遺構の切り合い関係はやや不明瞭であるが、飛鳥時代の須恵器等が散見されることからこの時期と判断した。この時期の竪穴住居も古里地区ではC 地区、D 地区を中心に多数検出されている。

（III）奈良時代の遺構

今回の調査で検出した遺構のうちこの時期と考えられるものが最も多く、竪穴住居13棟、掘立柱建物5棟、土坑9ヶ所、柵、溝等がある。

竪穴住居13棟はいずれも1辺4m～5m前後の方形を呈しているが、柱掘方の明瞭なものは見られなかった。竪穴住居の重なり合う部分での切り合い関係は、S B 1645→S B 1644→S B

1643、S B 1654→S B 1655といった順序で建てられたものであることを把握した。

一方構造の上では、S B 1654で部分的に周溝を検出したほかS B 1665とS B 1670の2棟ではカマドを検出した。S B 1665のカマドは北壁に位置し、中央に長い河原石1個を立てた支柱をもつ。またこの部分で完形品を含み、現位置でつぶれたものと考えられる土器数点が出土している。S B 1670では北壁中央に炭化物の混じる焼土面を検出した。支柱石等は遺存しなかったもののカマドと考えられる。S B 1666の北東隅ではほぼ完形の甕など数点の土器が集中して出土した。焼土などカマドを想起させるものは認められなかったもののS B 1665のカマドを除いて他の竪穴住居には見られなかったものである。

掘立柱建物は調査区西端で4棟、中央部で1棟の計5棟を検出した。

斎宮跡中央部に多い方位にのる建物に類似するものはE 3°Nの棟方向を示すS B 1617の1棟のみで、他はいずれも古里地区を中心とした斎宮跡西部の建物群に類似して大きな角度をもつ棟方向を示す建物である。このうちS B 1616はE 37°Sの棟方向を示し、S B 1620はこれと直交するN 37°Eの棟方向を示す。またS B 1616の妻通りとS B 1620の東側柱列とがほぼ直線に並び、4間×2間であるS B 1616の柱間もS B 1620との柱通りを意識してかこれにあわせて東の2間のみが広がっている。2棟の建物の間隔もまた、4.8mと両者の梁行と同じ数値を示しており2棟の建物が同時に関連を持って建てられたことをうかがわせるものといえよう。

また調査区中央で確認したS B 1647もN 41°Eと他の建物に比べS B 1616・S B 1620に近い棟方向を示している。S B 1621はN 18°Eの棟方向を示すが調査区外にのび桁行の規模は不明である。柱掘方の重なりはS B 1616とS B 1617、S B 1620とS B 1621がそれぞれ一部の柱掘方で切り合い、S B 1616がS B 1617より古く、S B 1620がS B 1621より古いことを確認した。

奈良時代の土壇9ヶ所のうち7ヶ所はいずれも直径2m前後の不整な円形又は楕円形を呈するものである。S K 1629・S K 1630・S K 1631及びS K 1628はS B 1620・S B 1621の近くに、S K 1656・S K 1657・S K 1658はS B 1647の近くに集中することから建物との関連の可能性も考えられよう。またS K 1646は3棟の竪穴住居S B 1643・S B 1644・S B 1645と重なって検出したものである。西半部が調査区外にのびるものの一辺約4mあることから竪穴住居である可能性も考えられたが、隣の調査区に延長部分が見られないことから土壇とした。

柵S A 1674は柱間にやや一定しないところもあるが、2.8m前後でN 31°Eの方位をもって一直線にのびるものである。柱穴の切り合い関係からS K 1629・S K 1631より先行するものと考えられる。掘立柱建物にこの柵列と同じ方位を示すものはなく、浅く小規模な溝S D 1638がほぼ同様の方位を示すのみである。

溝は小規模なものを含め13条ある。S D 1618・S D 1622・S D 1624・S D 1627・S D 1632・S D 1633・S D 1635・S D 1648・S D 1649・S D 1662・S D 1663・S D 1664・S D 1668であり、



第1図 第30次遺構実測図 (1:200)

このうち S D 1635 は幅約 70cm、深さ約 60cm と小規模ながらしっかりした溝である。S B 1616・S B 1620 の棟方向と類似した N 38°E の方位を示しておりこれらの建物との関連も考えられるが、8 m の間隔をへだてて並行する溝 S D 1622 が S B 1616 と重なることがこの掘立柱建物と溝との関連を考えるうえで疑問といえよう。また S D 1633 は N 15°E と S B 1621 に近い方位を示しており、これと関連するものとも考えられよう。

(Ⅳ) 平安時代の遺構

本調査区で検出した遺構・遺物の大半は奈良時代及び鎌倉時代のものであり、平安時代の遺物は非常に少なく、遺構も土壇 1 ヶ所と溝 2 条を検出したのみである。

土壇 S K 1673 は平安時代中葉と考えられ 3.5 m × 3 m ほどの略楕円形を呈するもので、遺構検出面から約 1.9 m の深さで底に達する。掘り下げの当初は井戸かとも考えられたが、古里地区をはじめとする周辺の井戸調査例、水位の深さ、地山の砂礫の多い地層等を考慮すれば井戸としてとうてい機能しない深さであり土壇とした。このように 2 m に近い深さの土壇は斎宮跡では他に例を見ないものであり、遺物の出土も少なく、これと同時期と考えられる遺構も無いことからその性格は不明である。

溝は S D 1641 と小規模な S D 1671 がある。いずれも平安時代末葉と考えられ、S D 1641 は鎌倉時代の溝 S D 1642 と重複し、方位は N 22°E を示す。平安時代の他の時期と同様これらの溝に伴なうと考えられる建物等の遺構は何ら検出できなかった。

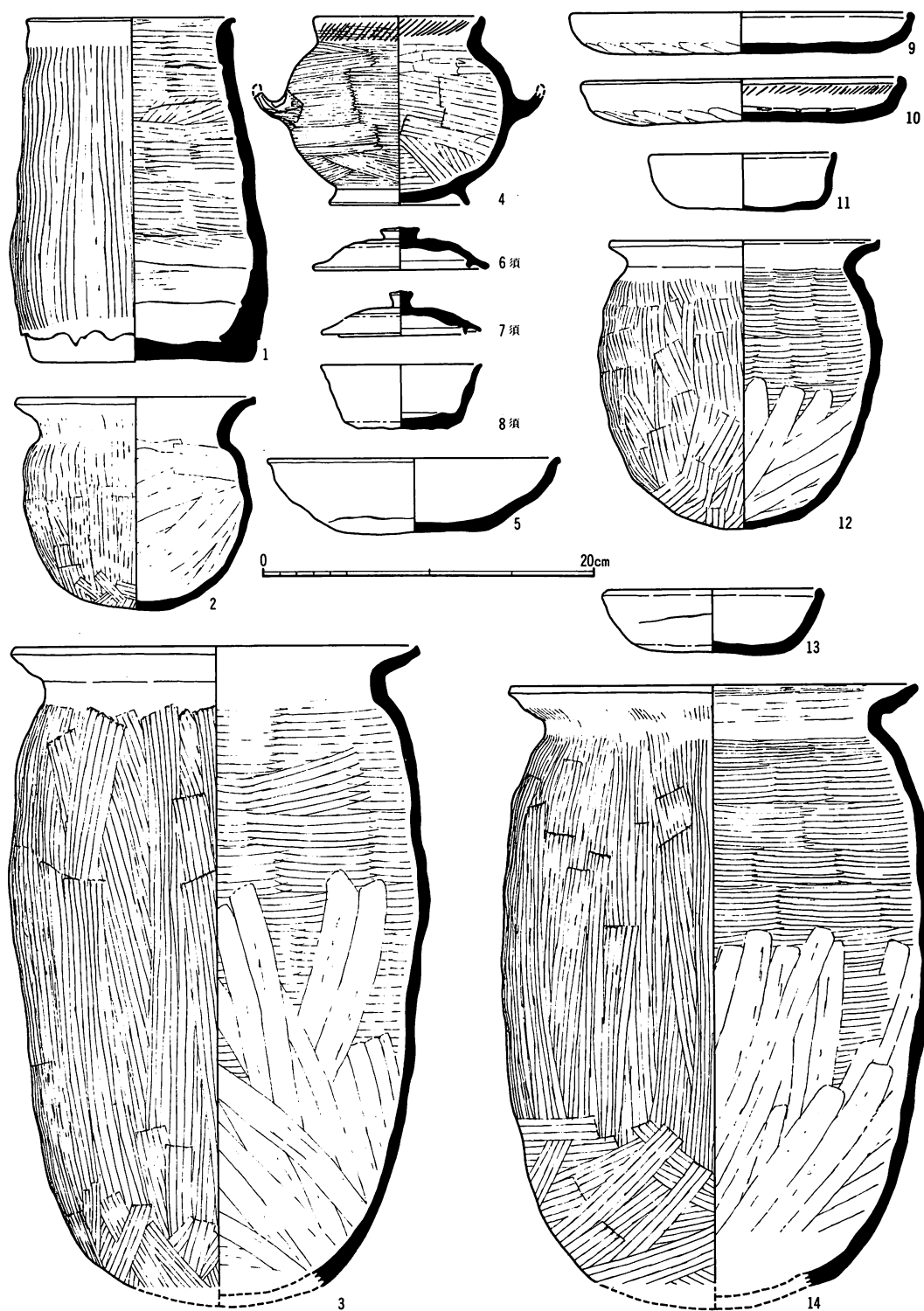
(Ⅴ) 鎌倉時代の遺構

掘立柱建物等は検出されなかったが、土壇 4 ヶ所、井戸 1 基、溝 3 条を検出した。

土壇は 4 ヶ所のうち S K 1636、S K 1637、S K 1659 は径 1.5 m 前後、深さ 10 cm ほどの小規模なものであり、遺物の出土も少ない。S K 1660 は隣地境界の畔下にのびるため全容は不明であるが、約 3.2 m × 1.7 m ほどの長楕円形を呈するものでやはり遺物の出土は少ない。

井戸 S E 1651 は奈良時代の竪穴住居 S B 1650 と重複して検出したものである。このため井戸上面では不明な点もあるが、径 3 m、遺構面からの深さ約 20 cm ほど掘り下げたのちその中央に径約 1.5 m の井戸掘り方が見られた。S B 1650 を切り込んで掘られているためか井戸の埋没土中からは鎌倉時代の遺物とともに奈良時代の土器片も多数出土した。

一方溝では S D 1639、S D 1642、S D 1661 の 3 条であるが、いずれも N 20°E の方位を示す。このうち S D 1661 は長さ約 10 m、幅 80 cm、深さ 20 cm ならずの小規模な溝であるが、S D 1639 は幅約 1.5 m、深さ 50 cm 前後の比較的しっかりとした掘り方をもつ溝で、調査区を横断するものである。また S D 1639 から 5 m の間隔をへだてて東側に並行する溝 S D 1642 も幅等は隣地境界の畔で不明であるものの深さ等の形状は類似するものであり、両者は並存するものと考えられることから 2 条の溝に挟まれた幅 5 m の部分は鎌倉時代における道路跡と考えられ、2 条の溝



第2図 第30次出土遺物 SB1615、1～8 SB1650、9～12 SB1665、13・14

はこれに伴う側溝であると思われる。

(VI) 遺物

本調査区で出土した遺物の大半は奈良時代のものが占め、平安時代の遺物は遺構と同様わずかに散見されるのみである。このためか緑釉陶器の出土はわずかに1点のみであり、近鉄斎宮駅周辺以東の平安時代の遺構、遺物の多い地区とは緑釉陶器の出土から見ても様相を異にするものといえよう。一方今回の調査による特殊な出土遺物に三彩陶器片と瓦等があげられよう。古里地区の試掘調査以後10年に及ぶ斎宮跡の発掘調査でこれまで緑釉陶器片の出土は約1400点にも及び、二彩陶器片も出土している。しかし三彩陶器片4点の出土は小片ながら斎宮跡において初めての出土であり、奈良時代の斎宮における当中垣内地区の重要性を示すものといえよう。いずれも小片で不明な点が多いが壺の肩部及び胴部と蓋の破片と考えられ、調査区の北東の区画である6ABJ—W地区の包含層、柱掘方等から出土したものである。

また瓦は忍冬唐草文の軒平瓦片1点のほか若干の平瓦片が出土している。これまで古里B地区で軒平瓦片2点のほか非常に少数ではあるが、付近に出土していることが知られている。

(VII) まとめ

古里地区を中心とした台地西辺における遺構の状況等を知ることを主たる目的の一つとした今回の調査では弥生時代中期の竪穴住居1棟を検出した。同様の時期の竪穴住居やその他の遺構、古墳時代後期の古墳跡を検出した古里地区、本調査区の南西約700mに位置し方形周溝墓の検出された金剛坂遺跡など祓川にのぞむ台地西辺には弥生時代においても点々と集落が営まれており斎宮成立以前の当地域を知るうえでも重要な資料といえよう。

奈良時代の建物遺構として竪穴住居と掘立柱建物とがあり、遺構の切り合い関係からは竪穴住居が先行するものであるということは古里地区や昭和54年度に発掘調査を行なった東裏地区でも確認されており、今回の調査でも掘立柱建物と重複する竪穴住居はS B 1619の1棟のみであるが、同様に竪穴住居が先行するものであることを確認した。

また調査区西部に集中する掘立柱建物4棟は柱掘方の重複関係等からS B 1616とS B 1620が並存し、かつ先行することを確認している。S B 1617とS B 1621とは柱掘方の重複が無いため確認できないが、棟方向の角度が時期に比例して小さくなるものと考え得るならば、S B 1617が新しいものと考えられ、S B 1619→S B 1616・S B 1620→S B 1621→S B 1617の時期的配列が考えられる。本調査区の数少ない掘立柱建物であるS B 1616・S B 1620がわずか2棟とはいえ規格的な建物配置を示すことを考慮すれば、S B 1619からS B 1616及びS B 1620への時期が奈良時代における斎宮の変遷についてひとつの画期を示すものと考えられよう。

またS B 1616・S B 1620の棟方向とほぼ類似した方位を示す溝S D 1635は小規模ながら一定区域を画する溝であることも考えられるがこれと並行するS D 1622がS B 1616と重複する点が

疑問として残る。

一方奈良時代の出土遺物としては古里地区で締脚硯の破片や大型土馬が出土しているのと同様、わずか4点の小片とはいえ三彩陶器片が出土していることは奈良時代の斎宮において当地区が重要な一画を占めていることを示しているものと考えられよう。

鎌倉時代の並行する2条の溝S D 1639・S D 1642に挟まれた幅5 mの道路は直線と仮定して北に延長すれば、古里A地区の西を経て古里B及びE地区の間に至るものと考えられる。古里B・E両地区では竹神社跡地北側から宮域中央部に至る通称古里古道と呼ばれる道路跡が検出されている。今回検出した溝もほぼ同時期と考えられることから古里古道との関連も考えられよう。

以上のような調査結果から斎宮跡西半部は奈良時代の斎宮が所在した地域である可能性が一層高まり、中垣内地区はその重要な一画を占める地区であることが明らかになったものといえよう。

Ⅲ 第 32 次 調 査

6 ACE—D・E・F（塚山地区）

塚山地区では、今までに昭和49年に第8—9次調査（Nトレンチ）、同51年に第12—1次調査（2Aトレンチ）が行なわれている。2Aトレンチ調査では平安時代の掘立柱建物2棟、瓦器の風字硯を出した土壇等が、Nトレンチでも2棟の掘立柱建物が発見された。平安時代の官衙地区が宮域中央部から当地区まで及んでいることが推定されたが、その実態はほとんど不明であった。

また、当地区一帯は、宮域中央部と古里地区との中間点に当ることから、奈良時代と平安時代の遺構が交錯していることも予想され、それぞれの時期の遺構状況を把握することも急務であった。

南に隣接する広頭地区を画する農道沿いには、古里B・E地区より東方へ続く古道の側溝があるものと予想されており、調査は、2Aトレンチの東端部を字界まで拡張し、南北に細長い調査区（24m×47m、1150m²）を設定して実施した。

調査の結果、奈良時代から鎌倉・室町時代に至る各時期の遺構を検出したが、その大半は奈良時代と平安時代のものであった。特に平安時代の遺構には、廂をもつ建物2棟を伴う13棟の掘立柱建物が含まれており、官衙地区の広がりを把握する上で重要な手がかりを得た。

（Ⅰ）奈良時代の遺構

竪穴住居（SB1725）、掘立柱建物（SB1700）、方形周溝2基（SX1685、SX1699）と土壇（SK1681～SK1683、SK1727、SK1819）を検出した。

SB1725は、4.2m×3.7m、深さ28cmの長方形を呈し、北壁にカマド、東壁北端部に貯蔵穴を伴う。長軸の方位はN20°Eであった。出土遺物には、須恵器大甕1、土師器の杯2、甕4、長甕6個体があり、貯蔵穴内には長甕1個体が横転した形で出土した。

SB1700は一辺が5.6mの総柱建物で柱掘方は径80cm、深さ50cm内外であった。重複するSX1699より新しく、奈良時代後半のものと推定される。

方形周溝SX1699は一辺が10mの隅丸方形を呈し、溝は幅1m、深さ20cm～42cmで、底部に凹凸があり、隅の部分がやや浅い。SX1685は、SX1699より大型のものと推定されるが、溝の様子はSX1699に類似する。軸方向は共にN40°Eで2基が東西に並列する。遺物はSX1699より土師器甕、椀、高杯、かまど、須恵器高杯が出土。椀2個体はほぼ完形であった。

これらの遺構は、出土遺物や切り合い関係より方形周溝→竪穴住居→総柱建物の順に新しい

ものと推定される。

土壇は5ヶ所に検出した。北西端のSK1681～SK1683は切り合い関係が不明であり、同時期のものであろう。SK1727、SK1819は、長径2.8mで深さはそれぞれ30cmと43cmを測る同規模の土壇であるが、SK1819の東壁は風倒穴で破壊されている。遺物は、SK1729より土師器碗、杯、こしき、甕の細片が整理箱に1箱、SK1819は少量であったが長甕や碗の完形に近いものが出土した。

(II) 平安時代前半の遺構

単独する土壇SK1718を検出しただけであった。狭い調査区ではあったものの、この時期の遺構だけが希薄であるという特徴的な傾向がみられた。SK1718は径1.2m、深さ45cmで土師器杯、碗が各2個体と長甕や甕、須恵器杯蓋片等が出土した。

(III) 平安時代中葉の遺構

この時期に比定されるものが最も多く、掘立柱建物8棟(SB408、SB1680、SB1690、SB1695、SB1713、SB1715、SB1720、SB1721)、柵列2(SA1693、SA1694)、土壇12(SK407、SK410、SK1687、SK1697、SK1698、SK1704、SK1708、SK1709～SK1712、SK1714)を検出した。

建物は、規模及び配置状況等で柳原・御館地区で検出されたものと類似している。

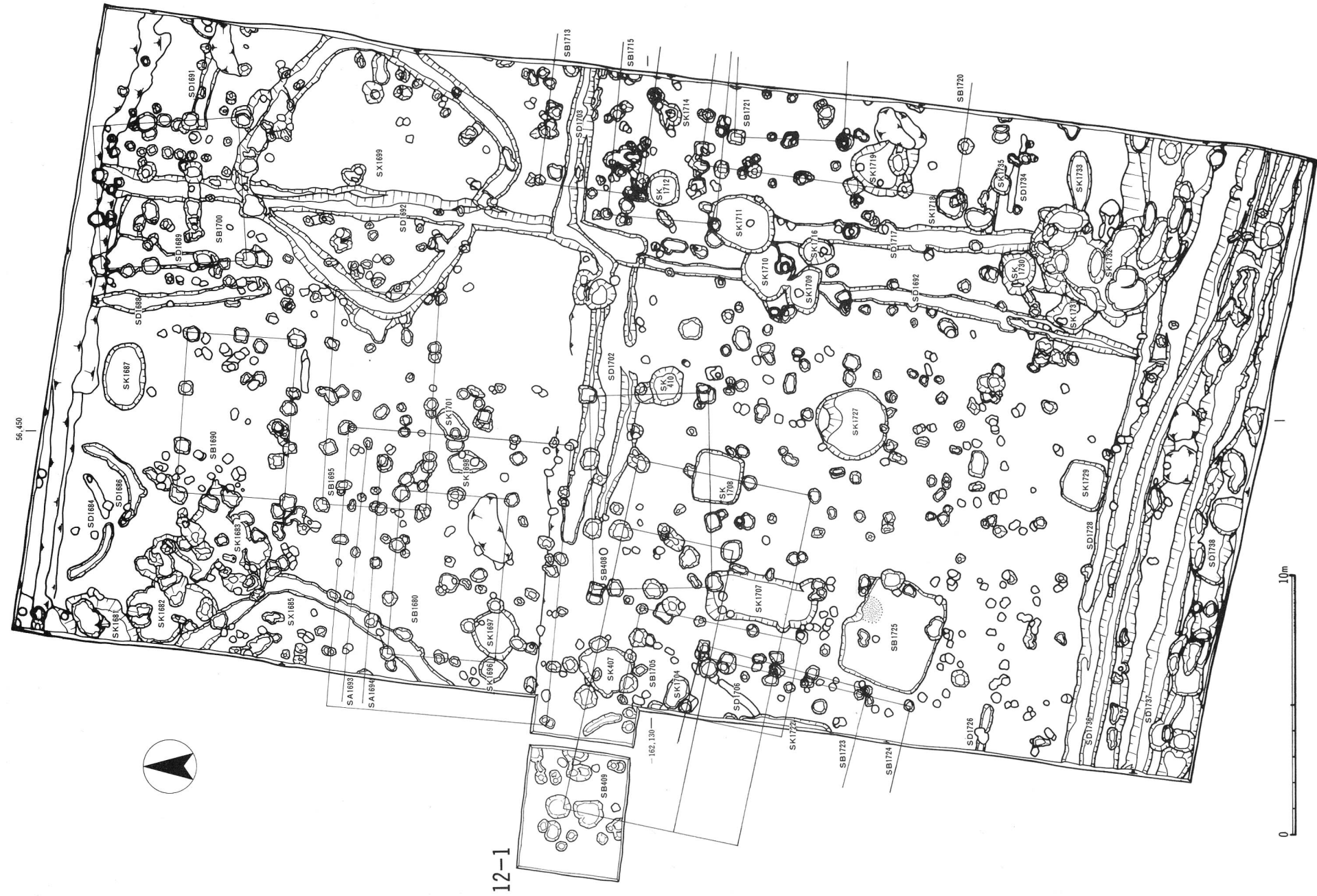
規模については、3間×2間を基本単位とするもので、4間×2間(SB1695)や5間×2間(SB1720)と推定されるものが各1棟ずつ混じる。柱間は棟方向が異なるSB408が梁行2.2m、桁行2.5mを測るが、他は全て2m～2.1mに統一されている。SB1680は5間×4間の建物であるが、四面廂をもっており齋宮跡での初例として重要な意味をもつものであろう。

棟方向ではSB408が方位に乗るものであるが、他はいずれも北で東へ大きく偏る。しかし、SB1720のN8°EからSB1695のE4°Sまでの範囲におさまるものであり、宮域中央部と同様の統一性がみられる。中でもSB1680、SB1690、SB1715の3棟はE5°Sに復元されるものであり一時期の関連する建物配置を示している可能性もある。

これらの建物群は、一定の場所に密集しており数回に及ぶ建て替えがあったことが推定されるものの、前後関係はほとんど不明であったが、出土土器よりSB408が最も古いものと推定される。

SA1693、SA1694は共に柱間がやや不揃いであり、かつ全容も不明であったが一応柵列とした。方向はSA1694がE5°S、SA1693がやや東へ偏るが共にSB1690の棟方向と一致する。

土壇は小型のものが多く、深さも浅いものが多く、SK1698、SK1709のように10cmまでの浅いくぼ地状のものから、SK1687、SK1712の40cmまでであった。また出土遺物の多い土壇にSK1710、SK1711があるが他の土壇は微量であった。SK410、SK1709～SK1712は土



第3図 第32次遺構実測図 (1:200)

師器の杯、椀、鉢、甕に灰釉陶器、製塩土器が混じり、S K 1710、S K 1711には緑釉陶器や黒色土器の細片や炭が混入していた。また、S K 407からは、土師器の各種土器と共に緑釉陶器椀、瓦器風字硯が出土している。ピット状土壇 S K 1714からは底部外面に「北」と墨書された灰釉陶器椀 1 点が単独で出土した。

これらの土壇の分布状況や出土遺物は S B 1680をはじめとする同期の建物群の性格に相応するものであろう。

(Ⅳ) 平安時代後半の遺構

この時期に比定されるものに掘立柱建物 (S B 409) と土壇 (S K 1696、S K 1701、S K 1707、S K 1729) がある。

S B 409は 6 間× 3 間で南面と東面に廂をもつ。廂幅は南面 2.5 m、東面 2.7 m で身舎部分よりやや広い。身舎柱掘方は径 80 cm を測り大型である。棟方向は、E12°S で平安時代中葉の建物に比べて東への偏り方が大きく、平安時代末葉の建物に近い。

土壇は 4 ヶ所で検出したが、いずれも出土遺物が少ない。S K 1707は 4.8 m × 1.8 m、深さ 25 cm の隅丸長方形で、S B 409との前後関係は不明であった。出土土器は、土師器の各種土器や灰釉陶器の細片に混じり、S K 1707より瓦器の椀、S K 1729より製塩土器片が出土した。

(Ⅴ) 平安時代末葉の遺構

掘立柱建物 3 棟 (S B 1705、S B 1723、S B 1724)、溝 10 条 (S D 1688、S D 1691、S D 1692、S D 1702、S D 1703、S D 1706、S D 1717、S D 1726、S D 1728、S D 1734)、土壇 5 ヶ所 (S K 1730～S K 1733、S K 1735) を検出した。

掘立柱建物 3 棟はいずれも南北棟であるものと推定される。S B 1724が 4 間× 2 間、他の 2 棟は 3 間× 2 間であろう。

平安時代中葉と比べて柱掘方が小さく、棟方向は S B 1705の N12°E から S B 1723の N15°E までに統一されているが、東への偏りが大きくなる傾向がある。調査区南西端にまとまっており、同時期の溝である S D 1692やこれに直交する S D 1728、S D 1702等の溝の方向にほぼ一致する。

溝は多いがその大半は調査区を N10°E の方向で南北に横断する S D 1692に関連するものと考えられる。

S D 1692は 40 m を確認。南端は鎌倉時代から室町時代の S D 1736～S D 1738で、北端は現代溝で切断される。幅は北半で 1 m、南半は狭い。深さは北半で 20 cm、南半が 10 cm 内外であった。S D 1702、S D 1703、S D 1728は S D 1692に直交する。S D 1702は 2 条が並走するが、北側の 1 条は底部が S D 1703に連なっている。S D 1728は S K 1732を切断して東方へ延びているが、西端部は S D 1702と同様に、S D 1692より西へ 10 m 延長して途切れている。いずれも S D 1692に伴いながら同期の建物群を区画するものであったことも想定される。

なお、これらの溝と同方向のものに S D 1726、S D 1734がある。また S D 1717は方向をやや
異なるものの規模が S D 1692と同程度であり、中央部で S D 1692より分岐していた可能性があ
る。

土壇は全て調査区南東隅にかたまっており同期の溝より古いものであった。

S K 1732は幅 3 m内外の溝状土壇で、深さは 0.7 m～1 mを測り底部は凹凸が多い。壁面は
崩れて内湾する。大型であるわりに遺物は少なく、土師器皿類の完形品や灰釉陶器碗や山茶碗
の細片も出土した。周囲にある S K 1730、S K 1731、S K 1733は浅くて土器の出土量も微量の
ものであったが、S K 1730からは使い捨てを語る多量の土器が出土した。S K 1730は 1.7 m×
1.4 m、深さ 45 cmの小型の土壇であるが、土器の総数は約 393個体を数えた。その内訳は土師
器小皿 360（高台のつくもの 24）、皿 8（高台皿 3）、碗 9、杯 4、高杯 1、鉢 1、鍋 2 の他
に黒色土器小碗 2、灰釉陶器小碗 2 個体であった。高台をもたない完形品の皿 282個体の約半
数には、内底から口縁部内外面にかけて油煙が付着しており、燈明皿として使われ大量に捨て
られたものであろう。

（Ⅵ）鎌倉時代から室町時代の遺構

調査区南端部の農道沿いで検出した 3 条の溝は、S D 1737が鎌倉時代に、S D 1736、S D
1738が室町時代に廃棄されたものと推定される。

これらの溝は古里 B・C 地区や P・I・L トレンチ調査で確認された古道の北側の側溝に当
るものである。2 条が並走するものであるが、北側の S D 1736は深く、底部に土壇状の凹凸が
多い。出土遺物は土師器の皿、鍋、山茶碗、練り鉢、常滑甕、天目茶碗、青磁碗等の細片があ
り、S D 1738の底部より布目瓦や須恵器の甕の細片が出土している。S D 1737は深さ約 50 cmの
溝でやはり前述の 2 条に並走する。

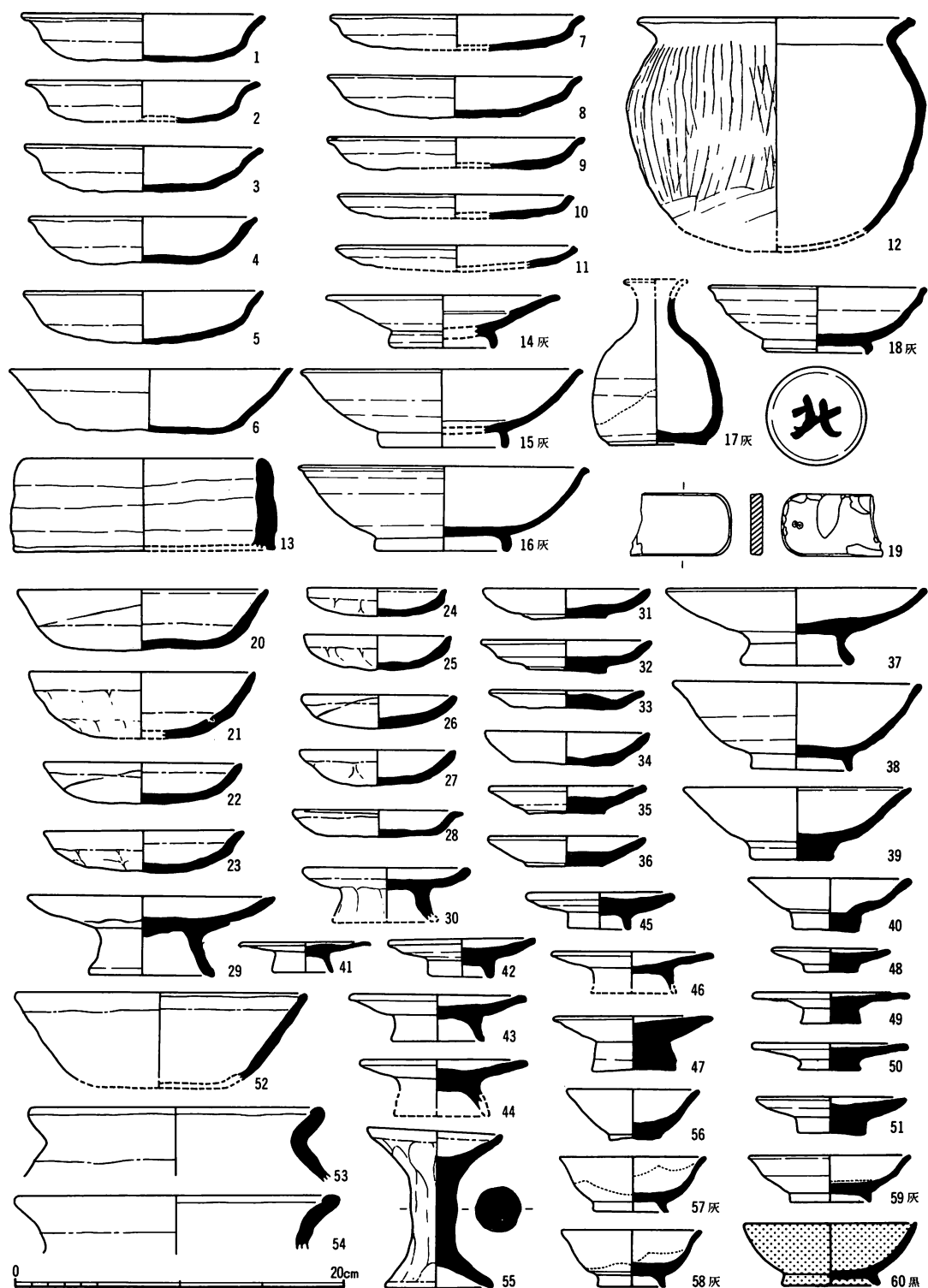
平安時代末葉の建物や溝の方向は、これらの溝とほぼ同方向であり、平安時代末葉頃より一
貫して道を意識した側溝があったことが推定される。

なお、S D 1736、S D 1738の上面には棧瓦を含む礫層が 20 cm～30 cm堆積しており、近年まで
溝状の凹部があったことも考えられる。

（Ⅶ）まとめ

本調査区で検出した奈良時代の方形周溝、竪穴住居、掘立柱建物は、今年度の第 33 次調査区
でも検出されている。同様の遺構は古里 C 地区で多数が確認されており、これら遺構の分布状
況を把握する上で新たな資料になるものであった。

竪穴住居、掘立柱建物は共に 1 棟ずつであったが、奈良時代の建物跡を中心とする遺構群が
古里地区から概むね宮域中央部西辺にまで及んでいることを示している。この時期の掘立柱建
物は平安時代のものに比べて重複して密集することが少ないこともあり、S B 1700に関連する



第4図 第32次出土遺物 SK1711、1~17 SK1714、18 包含層、19 SK1730、20~60

建物は調査区外の近辺にあるものと予想される。

方形周溝は第33次調査区でも3基が確認され、過去の調査で検出した8基を含めて、6地区に12基を数える。古里C地区の5基が古墳時代であり、他の6基はいずれも奈良時代に比定され埋没した時期が一定しない。しかし、その規模は全容が不明なものが多いものの直径20m内外の大型のものと、10m内外の小型のものに大別される。また、分布状況では、第22-1次調査区（斎宮小学校）の1基は近辺に3基の円形周溝を伴い他地区では2基以上が群集する傾向が認められる。

平安時代の遺構は時期的に平安時代前半が途切れており、第33次調査区と良く似た状況であった。しかし、その後は平安時代末葉にかけて多数の掘立柱建物が重複して建て替えられ、かつ棟方向も各時期ごとによく統一されている。これらの状況は宮域中央部以東の建物群に通ずる計画性をうかがわせている。

ところで、建物を棟方向でみると字宮ノ前以東の建物は、平安時代末葉の建物に北で東へ3度～6度程度偏るものが混じるものの、それ以前のは真北から西へ3度内外までのものが多い。しかし、Nトレンチの2棟やIトレンチの4棟はいずれも今次調査区で検出したものと同様、北で東へ偏る度合いが大きいものであった。これは宮ノ前と塚山・篠林地区との字界付近以西より造営計画の地割りが多少変更していることを示すものではなかろうか。

なお、今次調査区では2棟の廂付き建物が検出されたが、1棟は斎宮跡で初例の四面廂であった。瓦器風字硯、石帯、96点を数える緑釉陶器片、S K1730の皿を中心とする一括土器等の出土遺物は、これらの建物と相対するものと思われ、当地区が官衙地区の一部であったことを特徴づけている。

今次調査により当地区一帯は斎宮寮の成立から終末期にかけての各種遺構が埋蔵されており、斎宮跡の全容を解明する上できわめて重要な一帯であることが明らかにされた。

Ⅳ 第 33 次 調 査

6 ADE—D・L 6 ADF—L（篠林地区）

篠林地区は、東で楽殿、西で塚山、南で宮の前と字界をなし、国史跡指定範囲においては、宮域中央部よりやや北寄りに位置する。

かつて篠林地区では、宮ノ前との字界に沿って設けられた昭和49年度の第8—1次調査（Fトレンチ）において103片もの緑釉陶器が出土しており、又建物を区画すると考えられる溝が幾条か検出されている。これらの溝と宮域北部を走るとされる推定大溝との中間にあたる今回の調査地は、これまで一度も面的な調査が及ばなかった所であり、資料的に空白地帯に近かったので、広く調査をして、本地区の宮域全体における占める位置、性格付け等を明らかにすることが早急な課題とされていた。

調査は、面調査とトレンチ調査を併用し、合わせて2450㎡にわたり実施した。以下地区ごとにその概要を述べることにする。

（Ⅰ）6 ADE—D地区

畑の畦方向に沿って東西34m、南北53mの調査区を設定し、1802㎡を調査。その結果、竪穴住居19棟、掘立柱建物14棟、土壇32、井戸2、溝5、方形周溝1、円形周溝1を検出した。

【奈良時代の遺構】竪穴住居18棟、掘立柱建物4棟、土壇15、井戸1、溝4、方形周溝1がある。

竪穴住居は平安時代後半としたS B 1809を除き、すべてこの時代のもので、特に調査区北部で著しい重複状況がみとめられた。竪穴住居の平面プランは長方形を呈するものが多く、その規模は最小で7㎡、最大で40.8㎡で平均18㎡前後である。主柱穴の確認された建物はS B 1760、S B 1762、S B 1785だけで他では認められなかった。カマドは18棟中、12棟に焼土面の高まりとして認められた。又カマドの施設としてS B 1759では径14cm、高さ26cmの中空の土製支脚を、S B 1785、S B 1796では支柱石を設けていた。

竪穴住居の前後関係については、埋土の切り合い及びカマドの残り具合等から判断して、S B 1757→S B 1759→S B 1758、S B 1757→S B 1760→S B 1761、S B 1781→S B 1782→S B 1785の順であることを確認した。

S B 1758はS B 1759と東壁を共有しており、S B 1759の拡張と考えられる。同様なことは北に拡張が認められるS B 1785についても言える。

S B 1762は一部版築状の床面が残存しており、貼り床を構築していたものと考えられる。

掘立柱建物はすべて調査区の北部で検出。4間×2間のS B1752、3間×2間のS B1751、S B1780、調査区外へのびて規模の不明なS B1771がある。これらはS B1752を除いて、いずれも時期的に竪穴住居より後出であることが埋土の切り合い関係より確認された。

S B1752は、東側柱列の北から3番目の柱掘方が竪穴住居S B1754に切られており、これに唯一先行するものである。同掘方埋土内より鉄斧が出土している。

建物の規模は、このS B1752が一辺80cm～90cmの方形ないし楕円形の柱掘方をもち、比較的大型の建物である。他は径50cm前後の円形柱掘方をもつ規模の小さい建物である。

一方棟方向では、建物間にばらつきがあり、同時期に存在した建物の抽出は難しい面があるが、S B1752とS B1771は共に北に対し東へ9°ほど偏っており、同時存在の可能性がある。

妻柱の柱掘方は、側柱に対して浅いのがふつうであるが、S B1751の北側妻柱やS B1752の南側妻柱などは、極端に浅いということも特徴としてあげておきたい。後述する平安時代後半の掘立柱建物の中でS B1794の東側妻柱などは、柱掘方が浅かったためか検出できなかったものもある。

土壇には平面プランが円形を呈するS K1756、S K1764、S K1767、S K1770、S K1778、S K1783、S K1789、S K1791、S K1799と方形を呈するS K1786、S K1787、S K1803～S K1805、S K1820とがある。これらの内調査区南部で検出したS K1820は最大で、4 m以上×3.5 m、深さ30cmを測る。出土遺物には土師器甕・杯・皿・高杯・かまど、須恵器杯・杯蓋・高杯・皿等各種のものがあつ、量的に豊富で良好な一括資料である。S K1820は一応土壇としたが竪穴住居の可能性もある。その他の土壇からはあまり遺物が出土していない。量的に乏しいながらも全体を通じて、土師器杯・皿・甕類の出土が目立つ。

井戸S E1800は一辺2.3 m前後の砂礫層を掘り込んだ方形素掘り井戸で、周囲に東西3.7 m、南北3.9 mの範囲で15cmほど掘りくぼめた平坦部をもっている。壁面の残りが従来検出された井戸に比べ良好で、地山面より3.7 mまで掘り下げ粗い目の砂礫層に達した。まだ還元層に達していないので底である確証はないが、壁面の残りが比較的良好なこととも考えあわすと、当時湧水層に達しなかったため、井戸掘りを断念し、井戸としての機能を果たさなかったものとも考えられる。遺物の大半は井戸の最上層から出土した。

溝には東西溝S D1773、S D1774、S D1813、南北溝S D1812がある。S D1773とS D1774は幅0.4 m～0.6 m、深さ6 cm～15 cmの浅い溝で、心々距離2.0 mを測る並行溝である。S D1813はE 6°Sの方向を示し、幅0.7 m、深さ5 cm～15 cmで22 mまで確認できた。竪穴住居S B1816より新しい。S D1812はN 0°の方向を示し、幅1 m前後、深さ10数cmで調査区の南に延びる。

方形周溝S X1810は幅1.0 m～1.8 m、深さ5 cm～22 cmの浅い溝で、部分的に途切れるが、

ほぼ方形に一周する。中央部に古墳の主体部らしきものが検出されたが、遺物は全く出土しなかった。周溝南部のコーナーで土師器胴長甕、須恵器甕が出土し、又他のどこからも古墳時代の遺物が出土していないところから奈良時代のものとした。

〔平安時代前半の遺構〕 検出し得たのは、掘立柱建物 S B 1753 と土壇 S K 1797 のみである。

S B 1753 は 3 間×2 間の南北棟で、奈良時代とした S B 1752、S B 1755 と比べ、規模的に何ら遜色のない大型の建物である。

〔平安時代中葉の遺構〕 掘立柱建物 S B 1755 のみ検出した。周囲に奈良時代の竪穴住居が多数存在することもあって、柱掘方埋土には、奈良時代の土器が多く含まれていたが、1 点だけ平安時代中葉の土師器杯が入っていたのでこの時期の建物とした。

〔平安時代後半の遺構〕 竪穴住居 1 棟、掘立柱建物 6 棟、土壇 3、柵列 1 がある。

竪穴住居 S B 1809 は、出土遺物より平安時代後半の建物としたもので、宮域全体の中でも同時期の竪穴住居は極めて少ない。

掘立柱建物には、総柱で倉庫と考えられるもの（S B 1784、S B 1822）と身舎のみの住居と考えられるもの（S B 1792～S B 1794、S B 1807、S B 1815、S B 1818）とがある。後者では調査区外へのびて規模の不明な建物もあるが、すべて桁行 3 間～2 間、径 40cm ほどの柱掘方をもつ小規模な建物と考えられる。建物の棟方向は南北棟の S B 1807 を除き、すべて東西棟で、大半が北に対し東へ偏る建物である。

柵列 S A 1802 は、ピットが東へ 5 間分、南へ 4 間分並ぶので一応柵列としたものである。柵列の方向と一致する建物がないので建物との関係は不明。

土壇には円形を呈する土壇がある。径 1 m 前後で出土遺物の少ない小土壇（S K 1769、S K 1779）と径 1.7 m で、土師器杯・皿・碗が多量に出土した S K 1795 がある。いずれも深さは地山面より 12cm 前後と浅い。

〔平安時代末葉の遺構〕 掘立柱建物 2 棟、土壇 11、溝 1、円形周溝 1 がある。

掘立柱建物は調査区南部で検出された。いずれも調査区外へのびているが、S B 1818 は 3 間×(2)間の南北棟、S B 1822 は 3 間×3 間の総柱建物と考えられる。

土壇には、小土壇（S K 1766、S K 1777、S K 1788、S K 1811）と長楕円形土壇（S K 1772、S K 1775、S K 1776、S K 1806、S K 1808、S K 1814、S K 1823）とがある。

長楕円形土壇は長軸 3.1 m ～ 6.4 m のものがあり、ほぼ南北軸線上に一定の間隔を置いて並ぶ。長軸方向が平安時代後半～末葉の掘立柱建物の棟方向におよそ平行しており、何らかの建物と関係する施設であろうか。

S D 1824 は幅 0.6 m、深さ 20cm の浅い溝で、遺物はほとんど出土しなかった。

S X 1819 は東側が浅く、西側が深く掘られている溝で、東側で深さ 20cm、西側で 30cm を測る。

遺構面及び南壁セクションよりみた切り合い関係より東側の溝の方が新しいが、時期的には、出土遺物からすれば大きな差はない。なお、ここでは復元径18.4mの円形周溝と考えたが、単なる溝のコーナー部分である可能性もある。

【鎌倉時代の遺構】井戸1がある。

井戸SE1798は、径3.2m～3.5mの円形素掘り井戸で地山面より約80cmのところから壁面が崩壊し、大きく外側にえぐられている。出土遺物は圧倒的に山茶碗が多く、75個体以上を確認した。

【室町時代の遺構】調査区南壁セクションにより、ごく一部が確認された土壇SK1821がある。埋土内より土師器小皿5枚、鉄刀1が出土しており、中世墓と考えられる。

ところで遺構として検出できなかったが、調査区南東部の黒色土包含層中よりかなりの山茶碗が出土しており、鎌倉時代の住居址等が存在した可能性もある。

【遺物】遺物は平箱で168箱出土した。この内竪穴住居に伴うものが約 $\frac{3}{5}$ を占めている。そのため日常食器としての土師器杯・皿、煮炊具としての甕類が圧倒的に多い。SE1800とSK1820、SK1795で、それぞれ奈良時代と平安時代後半の比較的良好な一括資料が得られた。なおその詳細な編年的位置付けについては後日に譲ることにしたい。

緑釉陶器は20片出土。ほとんど碗と思われるが、1点だけ唾壺の肩部が含まれている。大半が調査区南部の遺物包含層から出土したものである。

墨書土器はSB1750出土のものが1点だけある。土師器杯底部に書かれたものであるが判読不明。

その他、特殊なものとして、前述の鉄斧、鉄刀に加え、遺物包含層中からも鉄斧1、土馬頭部が出土している。

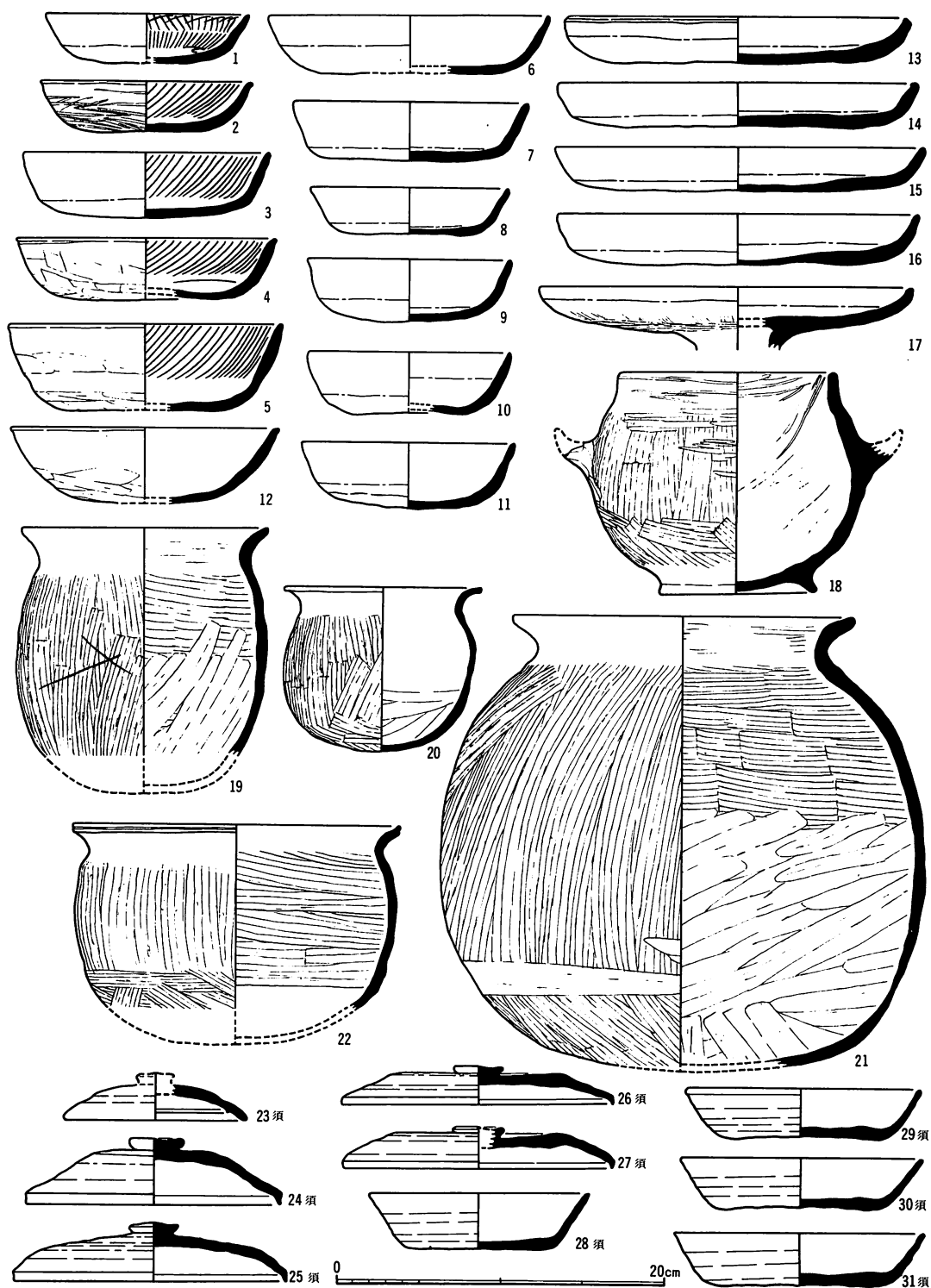
（Ⅱ）6ADE-L地区

面調査を実施した6ADE-D地区の南に続く地区である。巾8m、長さ54mのトレンチを設定し、432㎡調査した。

【遺構】調査の結果、奈良時代の土壇1（SK1825）、平安時代後半の土壇2（SK1832、SK1833）、平安時代末葉の掘立柱建物4棟（SB1827～SB1830）、土壇1（SK1831）、鎌倉時代の土壇1（SK1826）を検出した。

SK1825は巾1.9m～2.9m、深さ15cmのL字形に曲がる土壇で、北東隅で若干の焼土が検出されており、竪穴住居の変形かとも考えられる。

掘立柱建物はSB1828を除き、すべてが調査区外へのびてその全容を知り得ないが、柱掘方の径が30cm～40cmの小規模なもので、棟方向は北に対し東へ5°～10°ほど偏っており、6ADE-D地区で検出された同時代と考えられる建物と同様な規模、棟方向を示している。



第7図 第33次出土遺物 SE1800

【遺物】遺物の大半は各土坑より出土したもので、時期的には奈良時代と平安時代後半～鎌倉時代のものに限られている。特にSK1832からは、土師器杯・皿・甕をはじめ、灰釉陶器碗・皿、黒色土器、緑釉陶器など平安時代後半の各種の土器が出土した。SK1826からは、山茶碗、製塩土器に加え、通称ペラと呼ばれている非常に器壁の薄い土師器が多量に出土した。

緑釉陶器は総数19片出土。その内11片はSK1832から出土したもので、稜碗、碗、皿、壺がある。

(Ⅲ) 6 A D F-L

6 A D E-L地区より東へ55m隔てた畑地に、幅4m×長さ54mの南北トレンチを設定し、216㎡調査した。

【遺構】奈良時代の方形周溝2(SX1834、SX1835)、平安時代末葉の溝3条(SD1836～SD1838)を検出した。

SX1834は幅1.3m、深さは地山面より51cm～63cmを測る。SX1835は一辺12m以上、幅1.2m、深さ50cm～80cmを測る。溝底部近くで須恵器壺片が出土した。いずれもしっかり掘られた溝である。

SD1836、SD1837、SD1838は、ほぼ東西方向に走る溝で、切り合い関係よりSD1837→SD1838の順である。SD1836とSD1838は黒色土包含層上面より掘り込まれた溝で、それぞれ復元すると幅1.9m、深さ90cm、幅1.2m、深さ60cmとなる。両溝の心々距離は約4mである。これらの溝は、6 A D E-L地区のトレンチ調査では見つかっておらず、西走しながら、ある地点で北か南に折れ曲るものと思われる。

掘立柱建物としての柱掘方は、これらの溝より北では見つかっておらず、本地区が建物群の存在しない空白地帯であることがわかる。

【遺物】遺構が乏しく、遺物もこれに比例して少ない。平箱で2箱分出土。

(Ⅳ) まとめ

本地区で検出された遺構をみると、大きくは時期的に2つのピークがある。1回目は奈良時代の竪穴住居、そしてこれに続く掘立柱建物の時期、2回目は平安時代後半～末葉の掘立柱建物の時期である。そしてこれらの中間期にあたる平安時代前半～中葉の時期のものが皆無に等しく、つまり時期的に途切れるという点で、本地区の一つの特徴となっている。

奈良時代の竪穴住居は、宮域西部の古里、中垣内、東裏地区で見つかったものと規模、構造共に類似しており、宮域西部から北部にかけて一連に存在したものと考えられる。

ところで今までに検出された竪穴住居の^{カマド}位置は、東壁に設けられるものが多かったが、今回は北壁に設けるものもいくつか見つかっており、竪穴住居の切り合い関係から本地区においては、北壁に^{カマド}を設ける竪穴住居が先行するという知見を得た。

奈良時代に属する掘立柱建物は、古里地区、東裏地区に次いで多く見つかった。建物の棟方向は北に対し東へ偏るものが多く、しかも10°までにおさまっており、20°以上偏る建物が多い古里地区のものとは、若干棟方向において違いをみせている。同時代と思われる掘立柱建物は、このほかに斎宮小学校の東（広頭地区）で1棟、塚山地区で1棟、牛葉地区西部で1棟あるのみで、これより以東では、現在のところ見つかっていない。それ故、当地区を含む宮域西部は、奈良時代の斎宮を考える上で重要な地区である。

平安時代後半～末葉の掘立柱建物は、今回の調査で12棟検出された。その規模は3間×2間が基本型と考えられる。柱掘方は径40cm前後と小さく、建物の重複状況も疎であり、同一場所で執拗に建て替えの行われた宮域東部の御館、柳原地区、下園地区、中町地区とは、若干性格を異にしている。又この時代の建物の棟方向をみても、宮域東部では北に対し、西へ偏るものがほとんどであるのに対し、当地区や塚山地区では、北に対し東へ偏るものが多い。

こうしたことから当地区は、平安時代後半～末葉にあつては、建物の規模、棟方向、重複状況等の点で宮域中央部から東部にかけての地区と若干異なりを見せてはいるものの、同じ範疇の中でとらえるべき地区と考えられる。

V 第 34 次 調 査

6 AFK—F・G（西加座地区）

昭和54年度の延長約500mにわたるトレンチ調査のうち大型の柱掘方をもつ掘立柱建物を多く検出した部分の建物群の広がり等を知るために設定した調査区である。これまで当調査区の隣接地3ヶ所で個人住宅建設に伴う小規模なトレンチ調査を行ない平安時代各時期の掘立柱建物や大型の柱掘方を検出している。

また昭和54年度に約1000㎡の面調査を行なった北東 100mあまりの第24次調査区（6AGF—D）では、規格性をうかがわせる配置をもつ建物群を検出し、同じく昭和54年度に行なった第29次調査（トレンチ調査）のうち当調査区の南西約 100mにあたる6AFL地区では掘立柱建物の大型柱掘方のほか、土師器の杯・皿等を主体としておびただしい量の土器を出土した土壇を多数検出している。

このような周辺の状況から、当地区は御館・柳原地区を中心とする斎宮跡中央部と同様中町地区の他地域とともに、平安時代における斎宮跡にとって主要な一画を占めていることを証する遺構が検出されることは十分に予想されるところであった。

調査の結果大型柱掘方をもつものを含め掘立柱建物26棟をはじめ柵、土壇、溝など平安時代前半から末葉に至る各時期の遺構が多数検出された。

（I）平安時代前半の遺構

掘立柱建物15棟のほか柵、溝、土壇等を検出した。掘立柱建物の中には一辺1mを超える大型の柱掘方をもつ建物と30cm前後の小規模な柱掘方のものとがある。棟方向で区別すればE2°NからE4°Nを示す建物群とE2°Sを示す建物群とに大別できるが、E2°Sを示す建物は調査区北東隅に検出したSB1843とSB1848の2棟のみであるが当調査区の北隣接地で行なった個人住宅建設に伴うトレンチ調査で同様の方位を示す4間の柱列SB1100が検出されている。

東でやや北に偏る棟方向を示す建物群はわずか2°の範囲に含まれる棟方向であり、多くの重複をもつことからより広域な範囲での建物配置を考慮したうえで時期区分を再整理する必要があると思われるが、E2°Nの棟方向を示す掘立柱建物ではSB1439、SB1854、SB1869の3棟がある。E3°Nを示す建物にはSB1436、SB1437、SB1440、SB1442、SB1853、SB1861、SB1864、SB1865の8棟があるほか柵SA1855やSD1856、SD1857の溝などが同様の方位を示す遺構としてあげられる。E4°Nの建物は調査区中央に見られ、SB1438、SB1860の2棟があげられる。このうちE3°Nを示す建物群の整理・再考を必要とするが、E2°N

またはE 4°Nのいずれかに組み入れて概観すればE 4°NからE 2°Nへの変遷が考えられるようである。しかしながら同一の方位を示す建物でも重複や近接するものが多いことから建物のセット関係はさらに細分する必要があるだろう。

また当調査区の掘立柱建物の特徴の一つである大型柱掘方をもつ建物は平安時代前半では調査区中央に集中しており、S B 1436、S B 1437、S B 1438、S B 1439、S B 1440などがあげられる。

このうちS B 1436、S B 1437の2棟は西側に隣接する個人住宅建設に伴うトレンチ調査で延長部分の柱掘方を検出しており桁行の規模はS B 1436で3間以上、S B 1437で4間であることを確認している。S B 1438は3間×2間の身舎に東へ3.5mの張出しがつくものである。身舎の桁行柱間は不ぞろいで西から3.0m、2.5m、2.5mを測る。S B 1440は建替えを想起させる状態でS B 1441、S B 1442の2棟と重複し、S B 1442→S B 1440→S B 1441の順でS B 1441が平安時代中葉であろうことが昭和54年度のトレンチ調査で確認されている。

S B 1860は柱掘方はさして大型のものとはいえないが4間以上の桁行と2間の梁行である身舎の南面に2.5mの廂をもつ東西棟の建物である。このような調査区中央部の建物に比べ調査区南部では比較的小規模な建物を検出した。S B 1864は西側の妻通り2間を検出したのみで東の調査区外にのびる東西棟であるが、3ヶ所の柱掘方いずれにも根がための石が認められた。

S B 1865はトレンチ調査時にすでに検出済の柱掘方であるが、今回の調査により周囲の状況から建物として確認したものである。またS B 1869は今回の調査で確認した平安時代前半に属する建物の中では最も小規模なもので柱掘方も小さい3間×2間の建物である。

その他の遺構ではS A 1855の柵がある。柱掘方は小規模であるが柱間3.0mで溝S D 1856に沿って東の調査区外にのびるが、西端はS D 1856と同じ地点で途切れている。またS D 1856の南側には3mの間隔をもち並行する溝S D 1857が調査区を東西に横断している。

さらに調査区の南で実施した昭和54年度のトレンチ調査で検出した溝S D 1455もS D 1857と27mの間隔をへだてて並行することからこれら柵や3条の溝は一体となって一定の建物群を区画する溝とも考えられよう。

一方土壇ではSK 1443、SK 1445、SK 1863の3ヶ所がある。SK 1443とSK 1445の一部はすでにトレンチ調査によって検出し、SK 1445からは小型円面硯や「万」の字などの墨書土器をはじめ多量の土器が出土している。SK 1445は今回の調査によって4m×3.5m、深さ約60cmのほぼ全体を掘り下げた。その結果前回のトレンチ調査で出土した小型円面硯と同一個体である円面硯や「萬」の確認できるものなど多数の墨書土器をはじめ、土師器の杯・皿等を主体とした多量の土器が出土した。

S K 1445は単独で検出したが、土師器の杯・皿等が大半を占めた多量の土器が出土した土壇

は当調査区の南 6 A F K—L 地区で 2 ヶ所検出したのをはじめ南西約 100m の 6 A F L 地区では多数群集して検出している。

一方今回新たに検出した S K 1863 は 3 m × 1.2 m の不整形の土壇で比較的多くの遺物が出土したが、S K 1445 とは異なり杯・皿類ばかりでなく、甕等も多く含まれている。

そのほか小規模な溝に S D 1858、S D 1868 を検出した。S D 1868 は幅 30cm、深さ 10cm ほどのコの字状に曲がる溝で掘立柱建物に伴う雨落溝かとも考えられたが、これに該当する建物は検出されず、性格は不明である。

(II) 平安時代中葉の遺構

大型の柱掘方をもつもの 2 棟を含め掘立柱建物 9 棟、溝 1 条のほか四脚門と考えられる配置を示す柱掘方を検出した。掘立柱建物の棟方向は平安時代前半の建物と類似し、E 2°N を示すものに S B 1841、S B 1846、S B 1446、S B 1871 があり、E 3°N に S B 1435、S B 1840、S B 1441 と四脚門と考えられる S B 1867 がある。また E 5°N を示す建物として S B 1866 と S B 1870 を検出した。

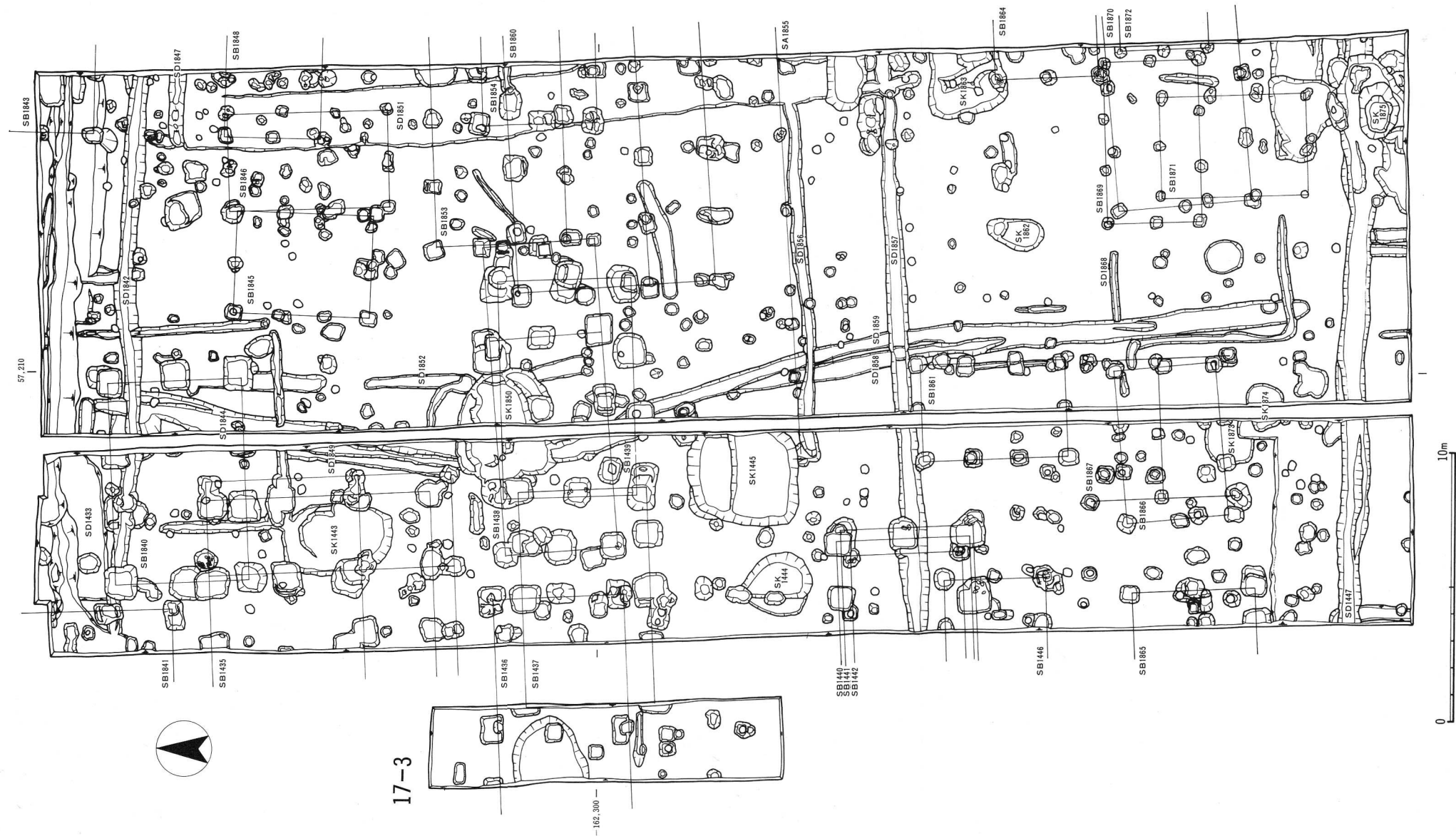
S B 1435 は西の調査区外へ延びるため全容は不明であるが、当調査区で最大の規模をもつ建物であると考えられる。梁行 2 間の東西棟で、東面に 2.9m、南面に 2.6m の廂をもつことから西面を含め三面廂になることも考えられる。また廂からさらに東面で 60cm、南面で 90cm をへだてて柱列が見られることから廂の建替えが行なわれたものかとも考えられる。

S B 1840 は柱掘方の一部を前回のトレンチ調査ですでに検出していたものであるが、今回面的に広げた結果 3 間 × 2 間の掘立柱建物であることを確認した。柱掘方は大型で整然とした方形を呈するが、埋没土に地山の黄褐色土が多く、検出の難しいものであった。

比較的大きな柱掘方をもつ建物としては S B 1441 と S B 1841 がある。S B 1441 は各柱掘方に根がため石をもつものですがすでにトレンチ調査で検出している建物である。S B 1841 は調査区北西隅で検出した建物で北と西が調査区外に延びるため全体の規模は不明である。S B 1435、S B 1841 の西側隣接地では個人住宅建設に伴う事前調査を実施しているが、トレンチが小規模であったためか建物の延長部分に該当する柱掘方は検出されていない。その他の建物はいずれも小規模な建物ばかりで全体規模の明らかな建物は全て 3 間 × 2 間である。

S B 1867 は柱間 2.7m で並ぶ 3 本の柱掘方が 5.2m へだてて並行する四脚門かと思われる遺構である。昭和 52 年 8 月に実施した斎宮小学校の校舎建設に伴う事前調査でも平安時代後半の四脚門が検出されているが、これは東西に築地塀と 2 条の溝を伴って検出されている。これに比べ今回検出した S B 1867 は柱掘方が四脚門を思わせる配置を示すが、これに伴う溝・柵列等の遺構は何ら検出されておらず疑問として残されよう。

その他の遺構では幅 1.0m、深さ 10cm 前後の小規模な溝 S D 1849 がある。調査区の中央を南



第 8 図 第34次遺構実測図 (1 : 200)

北に蛇行しながらほぼ縦断する。掘立柱建物群が規格性をうかがわせるのに比べやや一定の区画に該当するものとは考え難い溝である。

(Ⅲ) 平安時代後半の遺構

この時期の遺構は平安時代前半及び中葉と比べれば比較的少なく、掘立柱建物 1 棟、土壇 5 ヶ所、溝等を検出した。

掘立柱建物 S B 1845 は N 2°E を示す南北棟である。北側に隣接する個人住宅建設に伴う事前調査で直交する E 2°S の棟方向を示す 4 間×2 間で平安時代後半の掘立柱建物 S B 1104 を検出している。S B 1845 の西側柱列と S B 1104 の東妻の柱列とが 13.5m へだてて直線上に並ぶことから並存することも十分考えられるものといえよう。

そのほか土壇ではトレンチ調査で検出している S K 1444 のほか今回 S K 1850、S K 1859、S K 1862、S K 1873、S K 1874 の 4 ヶ所を検出した。この時期の土壇としては最大の S K 1850 は調査区中央に残した境界の畔の東西にまたがり約 4 m×3 m、深さ 50cm ほどの不整形な土壇である。その他の土壇は長径 2 m に満たない浅いもので遺物の出土も少ない。

溝 S D 1851 は幅 2.3m、深さ 10cm ほどの浅い溝で調査区東辺で南北方向に 24 m にわたって検出した。幅に比べ浅いものであるが、一定区画にかかわる溝とすれば調査区以東に関連する建物が遺存するものと思われる。

(Ⅳ) 平安時代末葉の遺構

この時期のものと考えられる遺構は非常に少なく、調査区南端で溝 S D 1447 と土壇 S K 1875 を検出したのみである。

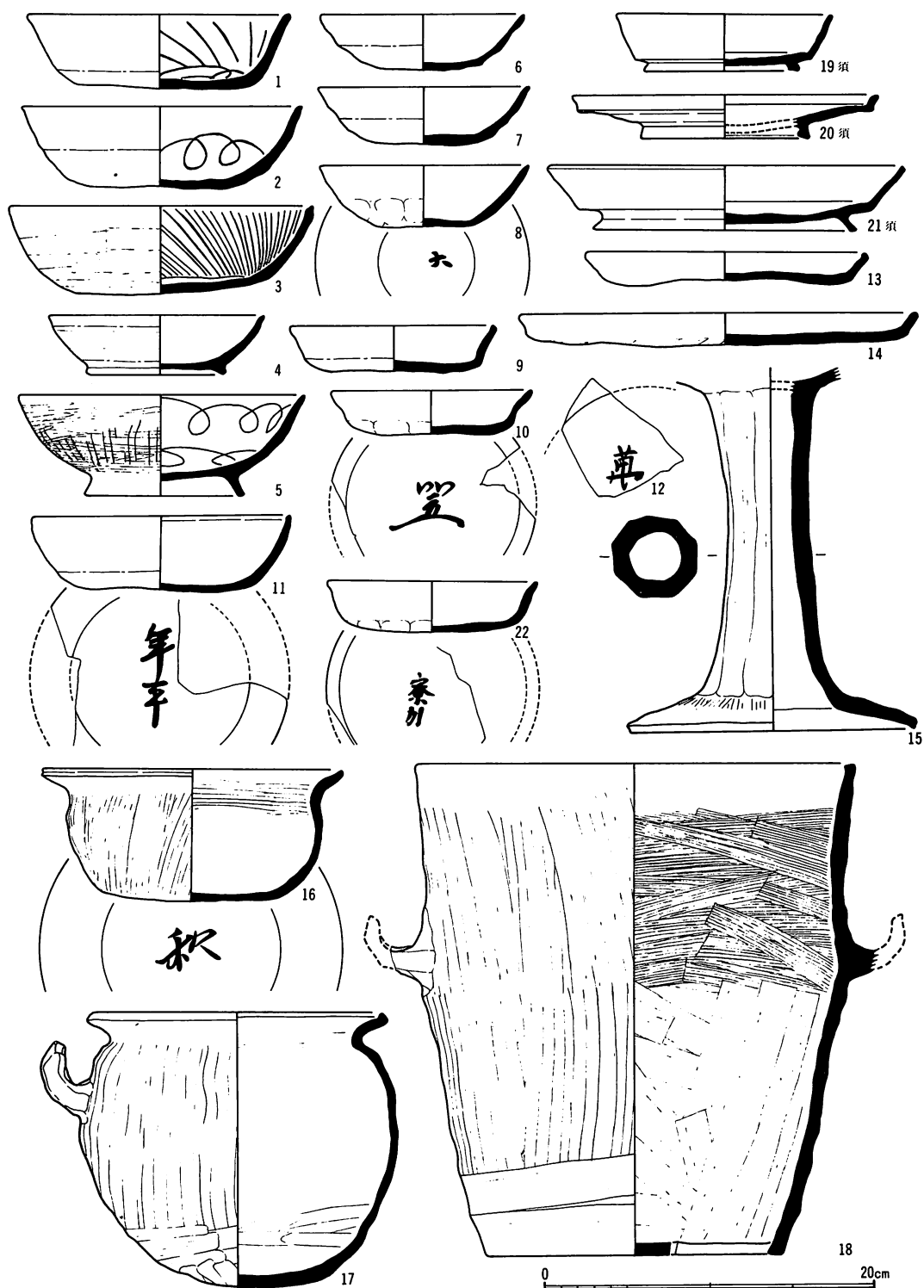
S D 1447 はすでにトレンチ調査で検出したものでおよそ E 2°S の方位を示し、東西に調査区を横断している。当調査区の南端から南側に隣する 6 A F K—L 地区にかけてはトレンチ調査によって平安時代前半から鎌倉時代にわたる各時期の東西溝を検出し、長期にわたり斎宮跡における基本的な区画の境界地にあたっていたものと考えられる。

一方土壇 S K 1875 は調査区南東隅に検出したものである。S D 1447 と重複しているが、湧水等のためその前後関係を明らかにすることはできなかった。調査途中には小規模ながら井戸かと思われる深いもので、2.1m×1.5m の不整な楕円形を呈し、地山面から約 1.2m で底に達した。この付近の地山は調査区中央以北と異なり暗黄灰色の粘質土であり、地形もやや底くなっているための湧水が激しかった。

(Ⅴ) 時期不明の遺構

おもな遺構としては掘立柱建物 S B 1872 のほか溝 S D 1842、S D 1852 等がある。S B 1872 は西側の妻にあたる柱掘方 3 ヶ所を検出したのみの東西棟で棟方向は E 3°N を示す。

一方 S D 1842 は調査区北端をわずかに蛇行して横断する東西溝で、幅 60cm 前後、深さ 30cm～



第9図 第34次出土遺物 SK1445、1～21 SK1863、22

40cmを測る。S D 1852は非常に浅く、調査区北半の中央を南北方向で約15mにわたり断続的にのびる溝である。

(VI) 遺物

今回の調査区における出土遺物について最初に挙げられることは、昭和54年度のトレンチ調査で24点、今回の調査で 216点、計 240点に及ぶ緑釉陶器片の豊富な出土量であろう。

昭和54年度末現在10ヶ年にわたって行なってきた斎宮跡の約50,000㎡にわたる発掘調査によって出土した緑釉陶器片は 1,422点に及んでいる。そのうちこれまで最も集中して出土した御館地区の出土数は 106点である。今回の調査区における 200点を超える出土量はこれに比べても非常に多いものといえよう。

一方S K 1445では小型円面硯の残片のほか、「大」、「萬」等を含め14点の墨書土器が出土した。昭和54年度のトレンチ調査時にもこの土坑からは「万」等多数の墨書土器が出土している。またS K 1863からは「寮口」の墨書土器 1点が出土している。S K 1445から出土した大量の土器のうち大半を占めるものは土師器の杯・皿類であり、これとともに土師器の甕・甑・須恵器杯・皿や製塩土器等が含まれていた。

そのほか特殊な遺物として獣脚の一部等が出土している。

(VII) まとめ

中町地区の重要性の一端を知り得た昭和54年度のトレンチ調査で大型柱掘方をもつ建物群が集中する地区の一つとして、その規模や広がり等の把握を主たる目的とした今回の調査では調査区の条件等から十分とはいえないながら多くのことが明らかとなった。

平安時代前半の遺構では柵 S A 1855を伴う S D 1856と S D 1857の 2 条の溝が調査区中央やや南を東西に横断し、大型柱掘方をもつ建物や廂つきの建物は主にこの北側に集中している。これらの建物はその重複や棟方向から少なくとも四時期ほどにわたるものと考えられる。2 条の溝はこれら建物群の所在する一定地区を区画するものと考えられよう。また土坑 S K 1445は土師器の杯・皿類が大半を占める大量の土器が出土し、墨書土器、製塩土器がこれに伴っている。同様の傾向を示す土坑は南西約 100mの 6 A F L 地区でも群集して検出し、大型柱掘方をもつ建物の一部をも確認している。S K 1445は単独で所在するものの、類似した性格を有する土坑であると考えられよう。

平安時代中葉の建物10棟の中で中心となる建物と考えられるのは S B 1435である。西半部が調査区外にのびるため確認できなかったが 3 面廂となることが十分考えられるものである。平安時代前半・中葉を通じて大型柱掘方をもつ建物は 3 間× 2 間または 4 間× 2 間と柱掘方に比べ小規模な建物である。このような中で廂をもつ大型の建物である S B 1435は当調査区の平安時代中葉の建物群の中では中心的な建物と考えられ、S B 1441、S B 1841の建物配置を考えあ

わせれば、調査区の西を中心とした一時期の建物配置も考えられよう。

S B1867は四脚門と考えられる遺構である。調査区の西約 800mで昭和52年度に実施した斎宮小学校々舎建設の事前調査でも四脚門が検出されている。これは東西に2条の溝が取り付くものであったが、今回のS B1867はこれに取り付く溝・柵等の施設は一切検出できなかった。このような点で疑問が残るが、S B1840から30数メートルの距離をへだてるものの中心線を揃えて真南に位置し、S B1867以南の隣接地では昭和54年度のトレンチ調査で溝以外にほとんど遺構のない一定区画の境界地にあたる等の周囲の状況を考慮すれば四脚門と判断し得るものといえよう。

一方緑釉陶器の出土は斎宮跡の中でも特に集中して出土した地区の一つであるが、調査区の中でもその集中する地点が認められる。

緑釉陶器の出土地点を4 m×4 mのグリッド別に分けた場合、その出土地点は調査区のほぼ全域にわたるものの、出土量の多い地点は調査区のほぼ中央を蛇行して南北に縦断するS D1844、S D1849、S D1858の溝付近に集中している。遺構検出面の浅い調査区北半では溝の埋没土中から出土するものが多く、遺構検出面の深い調査区南半では溝の属するグリッドの遺物包含層より出土したことが多い。直線を示さず、浅い溝であるがその重要性をうかがわせるものといえよう。

以上のような調査結果から中町地区が斎宮跡の中枢部に近い重要な地域である可能性が一層高まり、当調査区がこれまでの調査で斎宮跡の中心地域とされてきた宮ノ前・上園・下園・御館・柳原の諸地区と同様の重西性を示す地区であることが明らかになったものといえよう。

VI 第 35 次 調 査

(中町地区トレンチ調査)

中町地区一帯の畑地は、これまで遺構、遺物の実態が明確につかめていない地区であったが、昭和57年度には基本的な保全方針を決める管理基準の見直しをすることになっている地区に当る。昨年度に行った第24次、第29次調査により西加座・鍛冶山地区を中心とする中町の西辺及び北辺部は、斎宮跡でも重要な地区であることが判明した。

今次調査の主目的は昨年度の調査にひき続き、東加座・西前沖を中心とする中町地区の中央部及び南部の遺構の実態を明らかにすることであった。

調査は幅4m(一部2m)のトレンチ調査で総延長390m(1550㎡)に及ぶものであった。調査の結果、東西及び南北に延びる区画溝と、これらの溝に画された掘立柱建物跡31棟をはじめ、井戸3基や多数の土壇を検出した。

これらの概要は、小地区ごとに該当するトレンチ別にまとめた。

(I) 6 A F E - L・M・N・O・P地区

調査は西前沖の南端部で西加座との字界を通る農道のすぐ北側に東西71mの調査区を設定して実施した。

〔遺 構〕当調査区で検出した遺構は、平安時代前半から後半のものは少なく、平安時代末葉から鎌倉・室町時代のものが多い特徴がみられた。

平安時代前半ではS K 1876、後半ではS K 1877を検出しただけであった。

平安時代末葉の遺構は掘立柱建物4棟、井戸2基、溝4条と土壇5ヶ所がある。

掘立柱建物にはS B 1882、S B 1885、S B 1886、S B 1890がある。全て3間×2間の東西棟と推定されるが、S B 1890は総柱建物である可能性もある。柱間も全て2.1mに統一される。棟方向はS B 1882がE4°S、他の3棟はE2°~3°Nを示す。

井戸はS E 1880とS E 1904がある。2基とも円形の素掘り井戸で、S E 1880が径約5m、S E 1904が径約4mと推定されるが、共に完掘できず全容は不明である。

土壇はS K 1879、S K 1888、S K 1893、S K 1908、S K 1909がある。S K 1879は長径5.2m、深さ28cmで中央部に径2.5m、深さ50cmのくぼ地を伴う。S E 1880同様の土師器小皿や灰釉陶器碗等が出土。山茶碗が数点含まれる。他の土壇は浅く、土器の出土量も少ない。

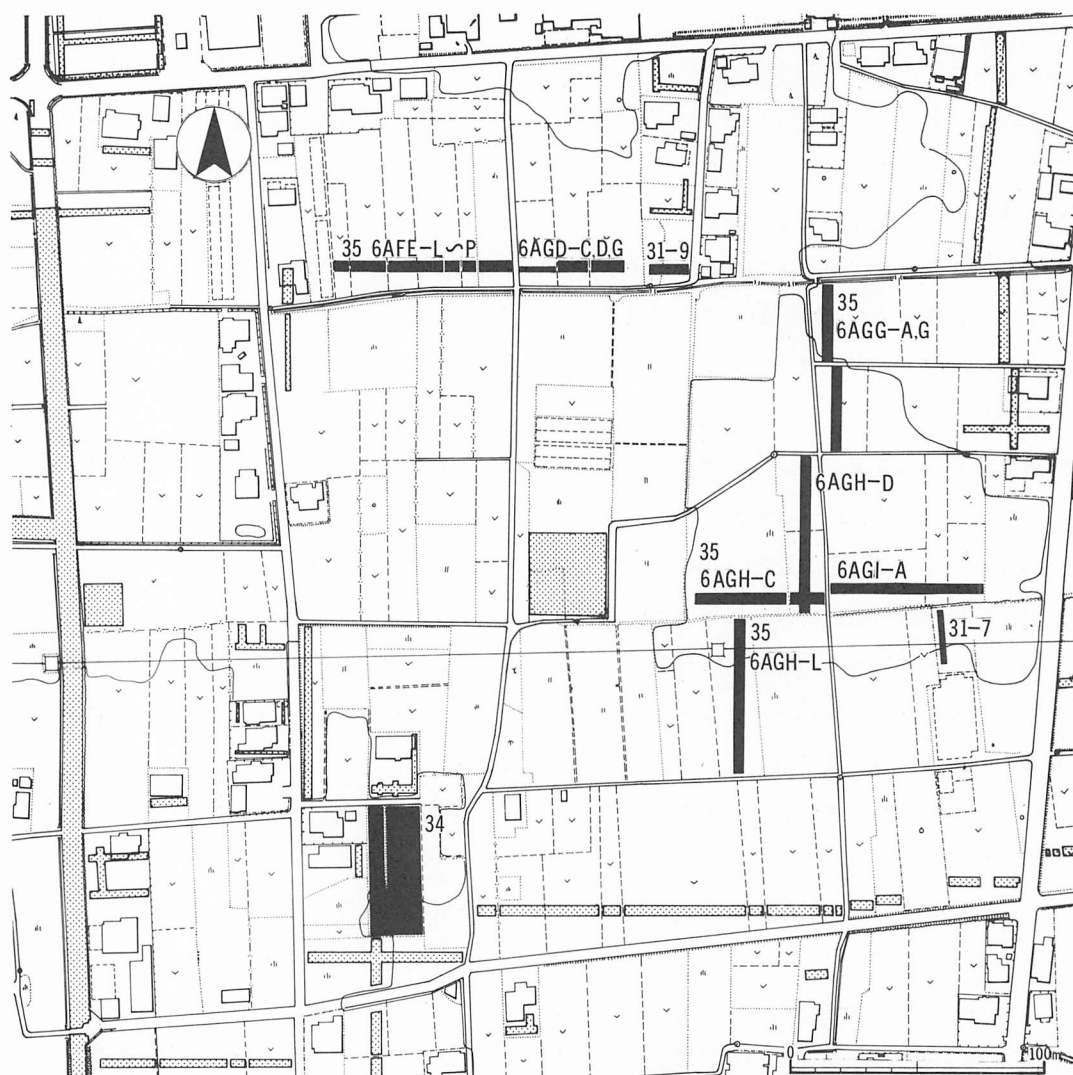
溝はS D 1878、S D 1889、S D 1900、S D 1910、S D 1911がある。S D 1878はS D 1900の直前から西端部へ続き、深さも西ほど深く西端部で30cmを測る。方向はE4°Nを示し、字界の農

道や排水溝の方向と一致する。S D1910、S D1911もこれらと同方向の長い東西溝であり、いずれも区画溝であるものと考えられる。S D1900は前記の東西溝と直交するもので幅 1.2m、深さ50cmを測り底部に凹凸が多い。なお、S D1900、S D1910、S D1911からは土師器の小皿類に混じり、山茶碗や常滑甕片もかなり出土しており、平安時代末葉から鎌倉時代に至る溝であろう。

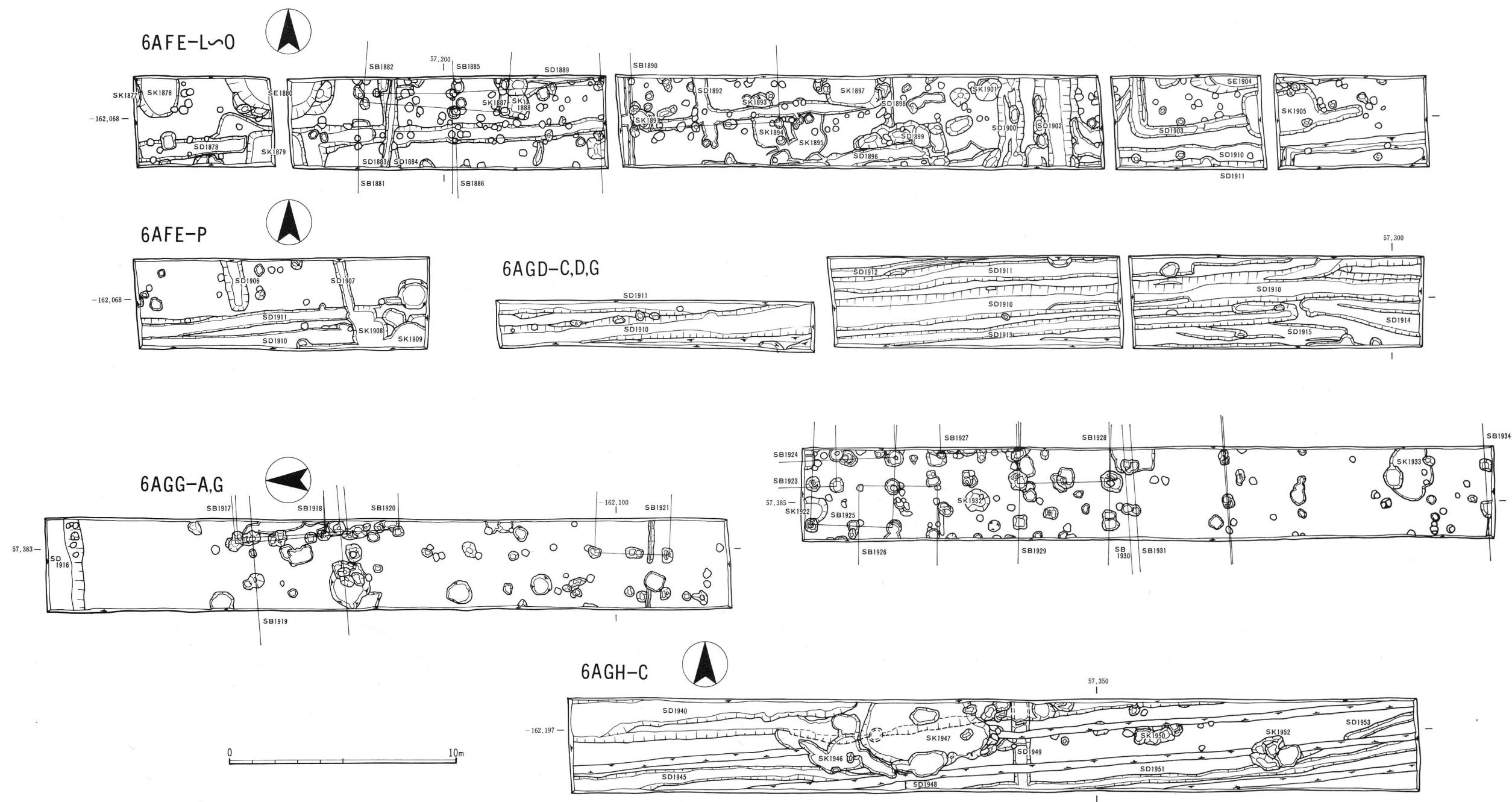
鎌倉時代から室町時代の遺構は、掘立柱建物1棟、溝10条、土壇10ヶ所がある。

掘立柱建物S B1881は妻柱掘方底部に径10cm大の扁平な石を置いている。柱間は 1.8mで平安時代末葉のものに比べてやや狭い。

溝はS D1883、S D1884、S D1892、S D1896、S D1898、S D1902、S D1903、S D1906、



第10図 第35次 発掘調査区位置図



第11図 第35次遺構実測図 6AFE-L~P 6AGD-C・D・G 6AGG-A・G 6AGH-C (1:200)

S D1907がある。S D1902は幅 1.6m、深さ90cmを測る大型の溝であるが、他の溝は狭くて浅いものが多い。溝の方向は平安時代のもとは異なる。S D1883以外は東西、南北溝を問わずN 8°~10°W及びこれと直交する方向を示す。これらの溝の大半は調査区内で途切れており北方へ続くものと予想される。

〔出土遺物〕平安時代の遺物はS K1876、S K1879、S E1880より整理箱1箱程度の土器が出土したが、細片が多い。鎌倉時代から室町時代の遺物はかなり多い。S D1896、S K1899、S K1905より厚さ1mm内外の薄い小皿や折り返し口縁をもつ鍋が多量に出土し、いずれも胎土の粗い山茶碗と青磁片、陶質の鉢を伴出した。なお、緑釉陶器片はかなり多く包含層を中心に18点が出土した。

〔II〕6 A G D—C・D・G地区

前記の6 A F E区よりさらに東へ41mを延長した調査区で水田部分のみ幅2mとした。

〔遺構〕本調査区は、区画の境界部分にあたっており平安時代から鎌倉時代に比定される数条の溝を検出したただけであった。

S D1910の南側には3条の溝が重複する。S D1910→S D1913→S D1914の順に新しく短期間の間に3回程度溝を修復したものと推定される。また、S D1914の南肩は溝の埋土を切りこんでおり、調査区南壁部にもかなり幅の広い溝があるものと推定される。これらの溝の上面は深さ40cmに渡り礫や磁器を伴う現代溝で攪乱されていたが最も残りの良いS D1910は幅1.3m以上、深さ50cm~70cmを測り東が深い傾向がみられる。

これらの溝は東西に延長し、西は昭和50年のXトレンチ調査区(第9—8次)の中央部を経て広域圈道路(第10次)で検出したS D510へ続き、東はTトレンチ調査区(第9—4次)の南端部をかすめて宮域東端部を画する大溝に続く総延長520mに達する大区画溝であるものと推定される。

なお、S D510は同規模で並走するS D509と共に宮域北端部を画する大溝に続くものであり、調査事務所北方でそれぞれ東西に直角に曲る溝である。また、S D509は調査事務所北側の字界を通り、“斎王の森”の前を経て宮の前で古里へ続く古道の側溝につながるものと推定されている。

〔遺物〕S D1910より土師器の皿、杯類に混じり山茶碗、練り鉢、常滑甕片などが整理箱に2箱出土した。最も新しいものと判断したS D1911には貫入のある陶器片が混じる。

緑釉陶器はS D1910を中心に16点が出土。皿や碗の細片が多い。

〔III〕6 A G G—A・G地区

東加座の中央部で東前沖との字界より南へ約60mに及ぶ調査区を設定した。G区の南北軸はA区より東へ3.4m隔てて設定した。両区合せて平安時代の掘立柱建物15棟、溝2条、土壇を3ヶ所検出した。

〔遺構〕平安時代前半の遺構は、掘立柱建物7棟(S B1919、S B1921、S B1928~S B1931、S B1934)と、A区の北端部で検出したS D1916がある。

掘立柱建物は S B 1934 が不明であるが、他の全ては梁行 2 間の東西棟であるものと推定される。柱間は 2 m 内外で棟方向も $1^{\circ} \sim 5^{\circ}$ 程度西へ偏る範囲に統一される。平安時代中葉の建物群と共に、南北方向で一定空間を隔てて密集する傾向がある。

S D 1916 は幅 1.6 m、深さ 70 cm で北側は排水溝に接しているものと推定される。前記の S D 1910 より南側へ約 8 m を隔てて並走する。S D 1910 同様に、西は第 9 - 8 次調査区 (X トレンチ) を経て、第 10 次調査区 (広域圏道路) で検出した S D 291 に続き、東は第 9 - 4 次調査区 (T トレンチ) を経て宮域東端部に達するものと推定される区画溝である。

平安時代中葉の遺構は、掘立柱建物 6 棟 (S B 1917、S B 1918、S B 1920、S B 1923、S B 1924、S B 1925) と土壇を 3 ヶ所検出した。

S B 1917 は桁行 3 間の南北棟と思われ、他は東西棟と思われる。規模、棟の方向などは平安時代前半の建物に類似する。中葉でも古い時期に比定する S B 1924 は柱間が 2.2 m でやや大きい。

土壇は S K 1922、S K 1932、S K 1933 がある。深さは 20 cm 以下。土器の出土量も少ない。

平安時代後半の遺構は掘立柱建物 2 棟 S B 1926、S B 1927 がある。柱掘方径が小さく、柱間も 1.7 m で前・中葉のものより狭い。

〔遺 物〕多量の土器を捨てた土壇がなかったため、土器の出土量は少なかった。S K 1933 より土師器の各種土器と共に、黒色土器や製塩土器片が出土した。遺構面が表土下 30 cm で、包含層も 5 cm 内外であったこともあり、緑釉陶器片はピット内より 2 点を見ただけであった。

(Ⅳ) 6 A G H - D 地区

6 A G G 区の南端部より西へ約 9 m 隔てた軸線上に設けた南北トレンチで、南へ 61 m におよぶ調査区を設定した。なお、本調査区の南端部では、これに直交する東西トレンチ、6 A G H - C 及び 6 A G H - D 区を設定した。

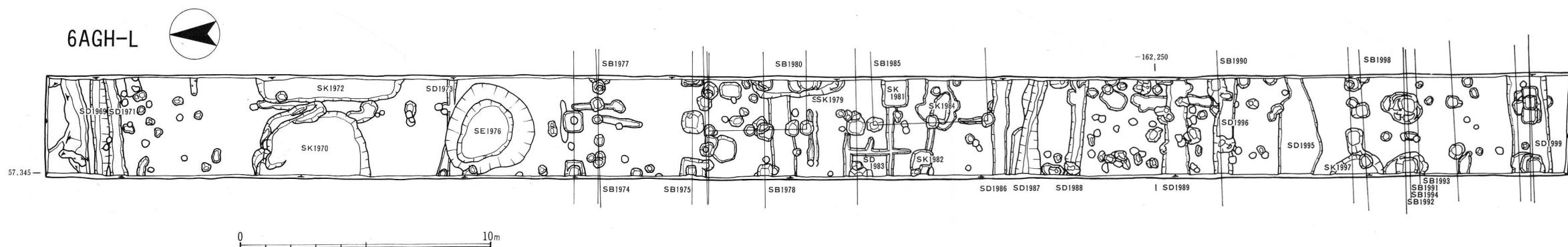
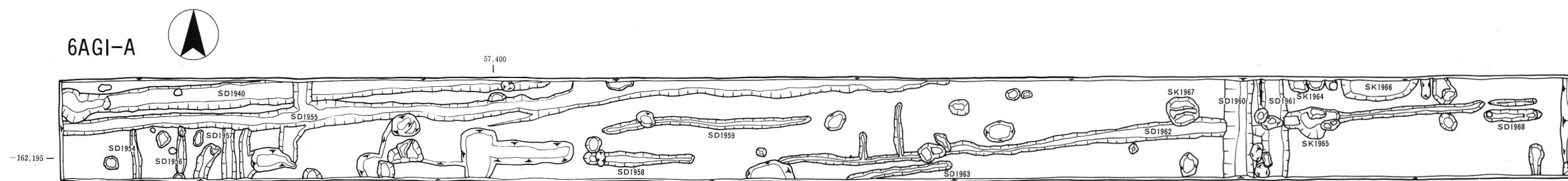
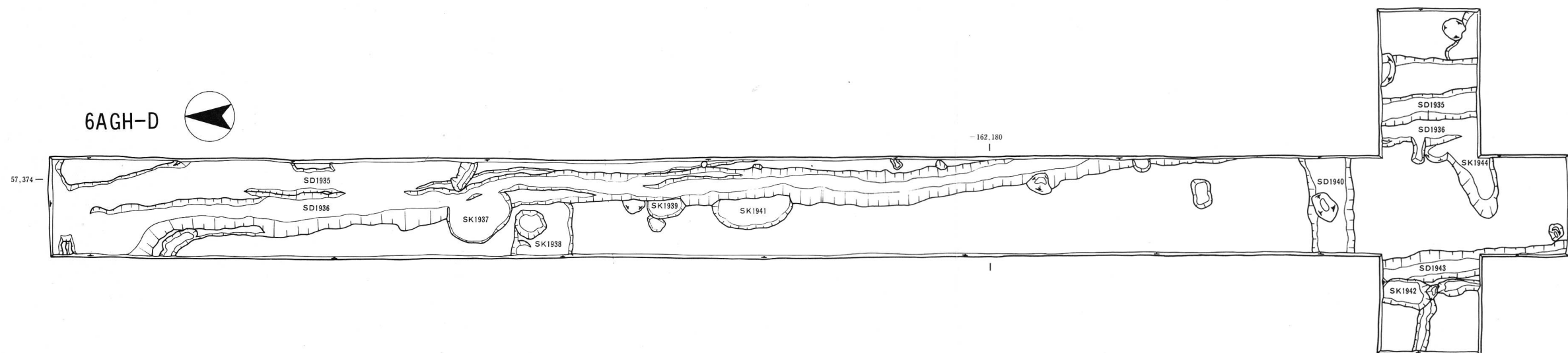
〔遺 構〕本調査区では溝 6 条と土壇を 6 ヶ所に検出しただけで柱掘方はまったく検出されなかった。

平安時代前半の遺構は、溝 2 条と土壇 5 ヶ所がある。

溝は S D 1935 と調査区南端部でこれに直交する S D 1940 がある。S D 1935 は幅約 2 m、深さ 40 cm。東半が部分的に浅い段状を呈し、北端部にはこれに直交する溝を伴う可能性がある。S D 1940 は S D 1935 に直交して、西は 6 A C H - C 区、第 24 次調査区の南端部をかすめ、第 10 次調査で検出した S D 529 に続く溝と推定される。今次調査で確認した 74 m を含めて 240 m 以上に達する区画溝であろう。

土壇は S K 1937、S K 1938、S K 1939、S K 1941、S K 1944 がある。いずれも S D 1936 で切断されて全容不明。S K 1937 は深さ 54 cm で、土器も多いが他は浅く土器の出土量も少ない。

平安時代後半から末葉の遺構は、溝 3 条と土壇 1 ヶ所を検出した。



溝には S D 1936、S D 1943 と平安時代後半に比定される S D 1951 がある。S D 1936 は幅約 1.5 m、深さ 50 cm で、前記の S D 1935 に西肩部分を接しながら並走する。南端部には西方へ T 字状に曲る溝を伴っているものと推定される。S D 1943 は S D 1936 に並走する溝で、その隔たりは心々距離で西へ約 5 m を測る。規模も S D 1936 にほぼ匹適しており、2 条が対応して道路状の区画をなしていたものと推定される。

S D 1951 はごく浅い溝で S D 1943 の直前で西方へ曲る。

S K 1942 は溝であることも考えられる。共に平安時代後半のものであろう。

〔遺物〕平安時代前半の土器が多く、S D 1935 より整理箱に 4 箱、S K 1937 より 1 箱、S K 1938 より 1 箱が出土した。土師器の杯、皿、甕類が多く少量の須恵器、灰釉陶器、製塩土器、黒色土器、土すい等がみられた。平安時代末葉の S D 1936 からは、土師器の小皿類と鍋の他に山茶碗もかなり出土した。

(V) 6 A G H - C 地区

前記の 6 A G H - D 区南端部に直交するトレンチで、西方へ 37 m に及ぶ。

〔遺構〕平安時代前半の遺構は前記の S D 1940 の他に土壇を 3 ヶ所検出した。

S K 1946、S K 1947 は切り合い関係が不明であり同一のものであることも考えられる。S K 1947 がやや深く約 60 cm を測るが、共に底部に凹凸が多く南壁部が内湾する。共に S D 1940 により北側が削平される。S K 1950 は小型であるが、これらの土壇とよく似た形状を呈する。S K 1952 は唯一の平安時代中葉の土壇である。

平安時代後半から末葉の遺構には、S D 1945、S D 1948、S D 1949、S D 1951、S D 1953 がある。東西溝の 3 条は深さ約 10 cm の浅いもので、出土土器も微量である。途切れたり、ゆるやかに蛇行するが概ね S D 1940 の方向に沿っている。S D 1948 と S D 1949 は S D 1951 等の溝より新しいものであるが、その方向は N 3° W で S D 1940 等の区画溝に類似する。

〔遺物〕調査区全体で 3 箱程度の土器が出土しているが、その大半が S D 1940、S K 1947 に伴うものであった。緑釉陶器は包含層を中心に 4 点が出土した。

(VI) 6 A G I - A 地区

6 A G H - D 区東側の農道より東へ 60 m に及ぶ調査区で、中心線は 6 A G H - C 区より北へ 3.8 m を隔てた。

〔遺構〕平安時代前半の遺構は前述の S D 1940 と土壇 3 ヶ所を検出した。S D 1940 は北側が一段浅い段状になり、6 A G H - D 区と同溝の様相に近い。

土壇は S K 1964 ～ S K 1966 がある。S K 1966 は径 3 m、深さ 54 cm を測るが他は浅い。共に伴出土器は少ない。

平安時代後半から末葉の遺構には、S D 1940 に沿って南側に隣接する S D 1955 とこれに直交

あるいは平行する数条の小溝がある。S D1955は幅 0.6m～1 m内外、深さ西端部で約30cm、中央部で一番浅く約15cmの浅い溝で、平安時代後半のものと推定される。S D1959、S D1962等の小溝は6 A G H-C 区のS D1945、S D1951とよく似ており、やはり一環した区画の境にかかわるものであろう。

東端部のS D1960、S D1961はS D1962より新しく平安時代末葉に比定される。S D1960は深さ50 cmであるがS D1961は10cm～20cmの浅い溝である。

〔遺 物〕S D1940とS K1966よりややまとまった平安時代前半の土器が出土したが、他の遺構はほとんど土器を伴わないものであった。なお、緑釉陶器は1点が出土した。

(Ⅶ) 6 A G H-L 地区

6 A G H-C 区の中央部より南へ約 5.6m隔てた地点より南へ62mに及ぶ調査区を設定した。調査の結果、S D1940より南方へ約12mの地点で検出した2条の東西溝以南で、掘立柱建物12棟を初めとする多数の遺構が認められた。

〔遺 構〕調査区北端部のS K1970、S K1972は奈良時代後半に比定される土壇である。S K1970は径 9.5m、深さ50cm。S K1972はそれぞれ12mと20cmで、底部は共に平坦である。前者は完形品の多い多量の土器を伴うが、後者は土器の出土量も少なく、竪穴住居であることも考えられるが全容が不明であるため土壇とした。

平安時代前半の遺構は掘立柱建物3棟S B1985、S B1990、S B1994と土壇2ヶ所S K1979、S K1984がある。

掘立柱建物は3棟とも梁行2間の東西棟と推定され、棟方向は概ねE 2°Nを示す。S B1990やS B1994は柱掘方が径80cm、深さ60cmで、柱間も 2.6mを測る大型の建物であろう。

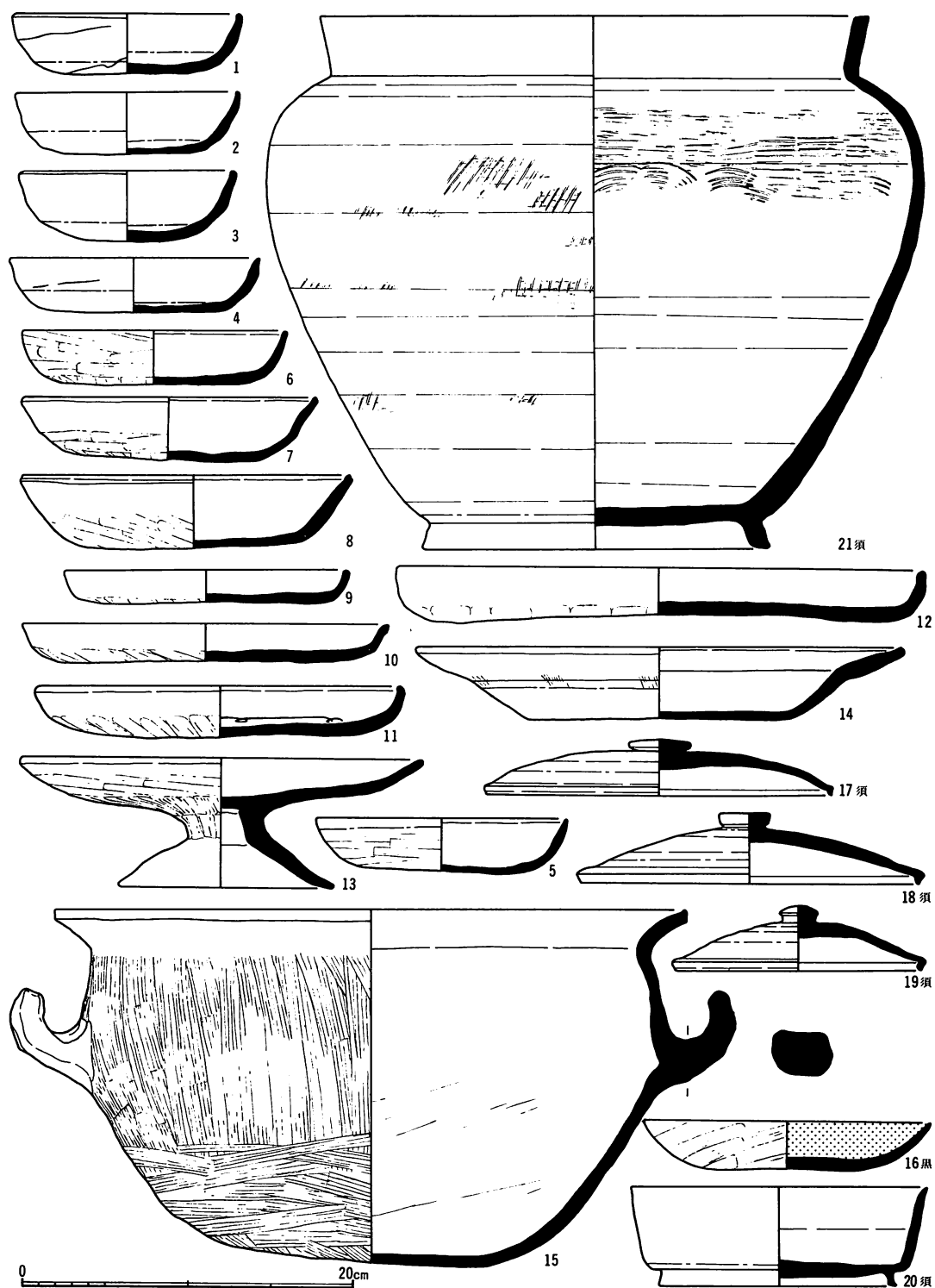
土壇は共に出土土器が少ない。深さはS K1979が60cm、S K1984が30cmを測る。後者はS B1985より古い。

平安時代中葉の遺構は、掘立柱建物9棟、溝4条と土壇3ヶ所を検出した。

掘立柱建物にはS B1974、S B1975、S B1977、S B1978、S B1980、S B1991～S B1993、S B1998がある。棟方向が真東からE 3°Nまでの範囲内に統一された東西棟と推定される。規模は柱間が1.8m～2 m、2.2m、2.5m内外のものが各2～3棟ずつみられる。柱掘方径が1 mに近いS B1975やS B1992等は柱間も広い。中央部に5棟、南端部に5棟が重複するが、特に南端部のS B1991～S B1993の3棟は前半のS B1994と共に同一場所に4棟が重複するものと考えられる。

溝はS D1979、S D1989、S D1996、S D1999がある。全て深さ15cmまでの浅い溝で、出土土器も少ない。S D1999はこれに重複する建物群より新しい。

土壇はS K1981、S K1982、S K1997がある。長方形のS K1981は深さ77cmであるが、他は



第13図 第35次出土遺物 S K 1970

浅く S K 1982 はくぼみ状を呈する。いずれも出土土器は少ない。

平安時代後半から末葉の遺構は少ない。後半のものに S D 1987 と S K 1984 に重複する浅いくぼ地があり、末葉のものは S E 1976 だけであった。S E 1976 は径 3.5m の円形の素掘り井戸である。上面より 1.5m 以下の礫層は大きく内湾崩落しており掘下げを中止した。遺物は少なく、土師器の小皿・杯と共に山茶碗 4 個体が出土した。

その他出土遺物が乏しく時期不明である遺構に、S D 1969、S D 1971、S D 1973、S D 1983、S D 1986、S D 1988、S D 1995 の溝がある。北端部の S D 1969、S D 1971 は区画溝と推定されるもので、深さ 30cm であるが上面は土取穴で削平される。S D 1973 は S E 1976 より新しい。S D 1988 は奈良時代の土師器片が出土している。S D 1983、S D 1986、S D 1995 は深さ 10cm 内外の浅いものであった。

〔遺物〕調査区全体で整理箱 15 箱の土器が出土したが、その大半は S K 1970 に伴うものである。S K 1970 出土の土器は土師器の杯・高杯・皿・鉢・甕・杯蓋が多く、須恵器は杯・杯蓋・甕など少ない。また木の葉底の浅い黒色土器碗も一点出土している。杯類の内面にはらせん線、放射状暗文が残るものと思われるが、器表面の剝離が激しく調整法も不明のものが多い。

(Ⅷ) まとめ

今回の調査は幅 4 m のトレンチ調査であったが全調査区より建物や溝を中心とする多数の遺構を検出した。これらは幅が広く深い溝を中心に、浅い溝や土壇を伴うが柱掘方が全くない調査区と、建物群とこれに伴う土壇等が多い地区に大別される。

前者は溝を中心とする区画の境界部分に当るものと考えられる。平安時代前半では、6 A G G—A 地区の S D 1916 と 6 A G H—D 等の S D 1940 は同規模の溝で、その隔たりは南北間で約 130m に達する。S D 1935 はこれらの東西溝に直交する。平安時代末葉の S D 1910 等の溝には、S D 1936、S D 1943 が北に延びて直交すると思われ、共に方形の大画区をなすものであろう。これらの溝はいずれも N3°~4°W 偏るものに統一され、ごく近辺に並走する。

一方、建物群は境界部分よりさらに 10m 内外の空間を隔てて造営され、棟方向も N3°W 内外で溝の方向に一致するものが大半をしめる。また、これら建物は一定場所に重複して密集する。

これらの様子は、建物群が溝を中心とする大区画に分けられており、しかも平安時代全般を通じて大きな変更がなかったことを示すものであろう。また、建物群の規模、棟方向、密集度などは柳原、御館地区など宮域中央部の様子に類似しており、区画溝も中央部より続くものであることが明らかにされた。

これらは、斎宮跡の造営計画を知る重要な手がかりであり、今次調査区を中心とする中町の中北部一帯が公有化対象地区となっている A B 地区にも増して重要な一帯であることを示している。

VII 第 31 次 調 査

(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)

第31-1次調査 6ADO-M (岩見宅地)

近鉄斎宮駅の南西約70mにある畑地で、幅2m、長さ30mのトレンチを設定し、60㎡調査した。遺構を検出した赤褐色地山面は表土下約25cmにあり、浅い。調査の結果、土堀2と柱掘方と思われるいくつかの穴を検出したが、調査区内でまとまる建物はない。出土遺物も平安時代後半の土師器片が少量検出されたにすぎない。

第31-2次調査 6ACP-I (鈴木宅地)

宮城南端部でも県道相可口停車場線の東側の畑で調査した。調査地区は幅2m、長さ12mの東西トレンチで約24㎡である。西半部は近世の攪乱を受けており、東半部で溝3条、土堀1を検出したにとどまる。このうち幅50cm、深さ5cmの浅い溝SD2002が鎌倉時代に比定されるが、他は時期不明である。

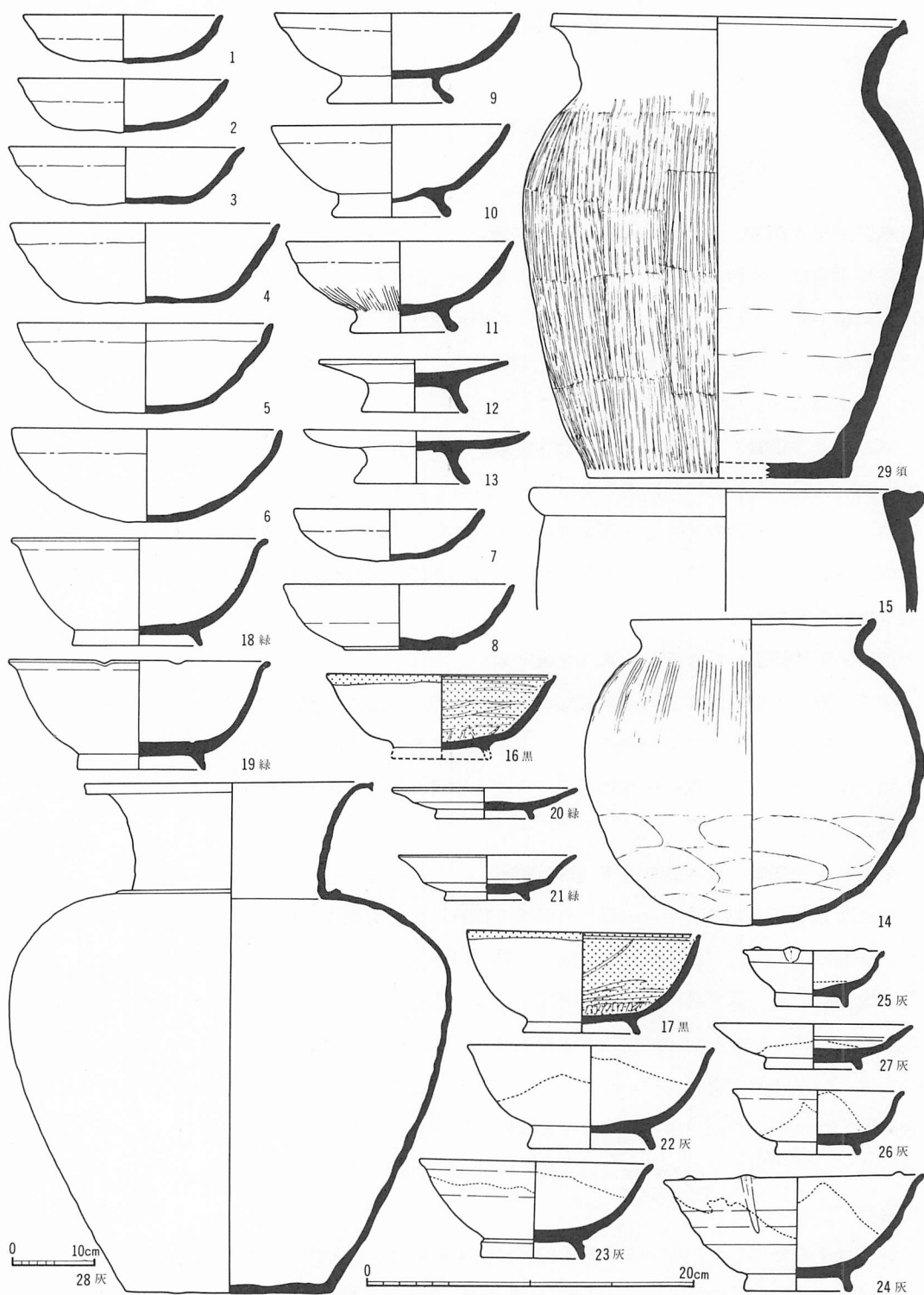
第31-3次調査 6ABD-A (北藪宅地)

調査地点は古里地区北部の台地端部の畑で宮域の北西端の境界に接する地点にあたる。調査区は、幅3.5m、長さ15mの東西トレンチで面積は約54㎡である。検出した遺構は、奈良時代の竪穴住居址1棟と、掘立柱建物と考えられる柱列のほか、埋土の状況から中世以降と思われる溝1条である。

第31-4次調査 6ADQ-T (百五銀行)

近鉄斎宮駅前の旧参宮街道に面した畑地で調査した。調査は、第1次調査としてT字状のトレンチを設定して約220㎡発掘した後、建物予定地の基礎部分約200㎡を追加調査した。この第2次調査では、南半部の表土下90cm以上に達する遺構に関しては、工事の関係でやむをえず遺構検出ができなかった。検出した主な遺構は、掘立柱建物11棟、溝7条、井戸2基、土堀等である。奈良時代の遺構としては、T字トレンチの西端部の浅い土堀SD2029以外はない。調査範囲が狭いため確認できる建物は平安時代中葉のもの6棟、後半のもの1棟、末葉のもの3棟であるが、柱掘方と思われる穴は多数にのぼっている。溝は大小いくつかあるが、いずれも室町時代のものである。

井戸は2基検出した。中央部のSE2000は径4mをはかる大型の素掘りの井戸で、深さ2mまで掘りさげただけであるが、土師器、灰釉陶器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器片77点等の多くの土器類のほか、銅地金張りの銚帯金具と思われる遺物も検出した。SE2009は径1.6mをは



第14図 第31-4次出土遺物 SE2000

かる室町時代後半の素掘りの井戸である。なお包含層から34点の緑釉陶器が出土した。

このように、この地区は、旧街道に近い攪乱された南半部をのぞくと、遺構密度は字御館、柳原両地区に匹敵するものと推定され、宮内でも建物の建替えが多い重要な一画と思われる。

第31-5次調査 6ACC-G (水谷宅地)

斎王集落の西部で字塚山の申請地において16m×12mの調査区を設定して 192㎡調査した。検出した主な遺構は、掘立柱建物3棟、竪穴住居1棟、溝2条、土壇等でいずれも奈良時代に属する。溝と竪穴住居は重なるが、切り合い関係から後者が古い。並走する溝は心々距離 3.3mを測るが、南側のS D 2043は幅90cm、深さ40cmで、北側のS D 2042は幅60cm、深さ20cmと規模に差があり、同時に2条の溝が存在したかは疑問の余地も残る。なお、包含層から緑釉陶器稜碗片が1点出土した。

第31-6次調査 6ABO-X (池田宅地)

坂本集落南部の県道南藤原竹川線に面した西側の畑地で、十字トレンチを設定し 204㎡調査した。検出した主な遺構は掘立柱建物4棟、溝8条、土壇等である。掘立柱建物はいずれも奈良時代のもので、北に対して大きな偏りを示している。溝はS D 2059の奈良時代の溝をのぞくと他は、鎌倉時代後半のものである。

第31-7次調査 6AGI-L (竹内牧舎)

宮域東端部の通称役場道西側申請地において幅 2.5m、長さ20.5mの南北トレンチを設定し 51㎡調査した。検出した主な遺構は掘立柱建物4棟、溝2条、土壇等である。遺構の時期はS K 2069が平安時代中葉である以外、すべて平安時代前半に属する。調査区は小範囲であるが、柱掘方とみられる穴は多数あって、遺構密度の高い地区である。

第31-8次調査 6ACN-G (森宅地)

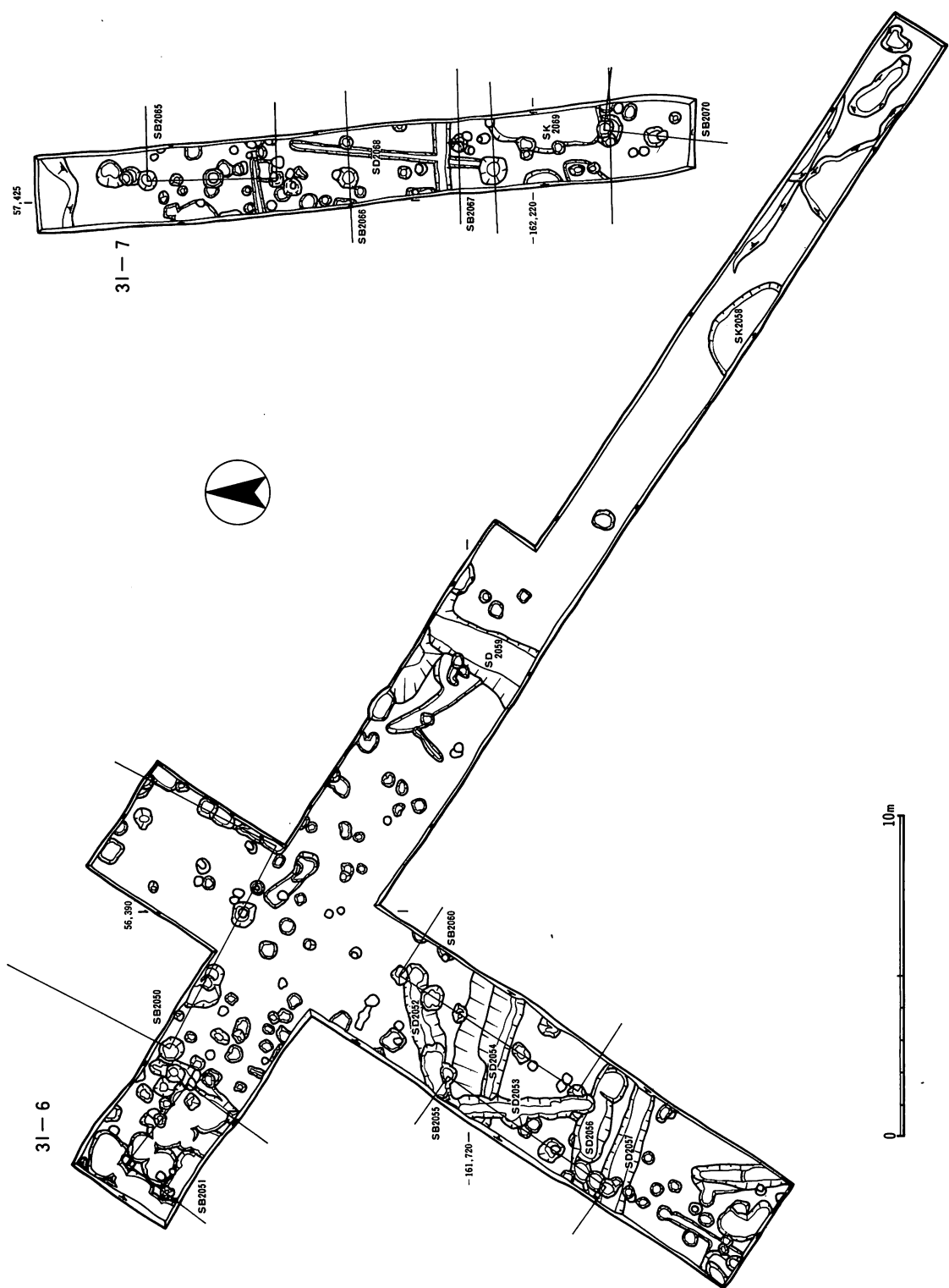
斎宮小学校東側の畑地で 150㎡調査した。検出した主な遺構は掘立柱建物1棟、溝3条、土壇等である。掘立柱建物が平安時代後半に位置づけられるが、他は奈良時代の遺構である。

第31-9次調査 6AGD-L (中川宅地)

北野集落南部の申請地で東西トレンチを設定し64㎡調査した。調査の結果、表土下 1.2mまで椀瓦や陶器を含む礫混入茶褐色土が埋まっており、土取りによって遺構は完全に破壊されていた。なお、埋土中から緑釉陶器碗2片が出土した。

第31-10次調査 6ADM-O (近鉄斎宮駅ホーム拡張工事)

近鉄斎宮駅プラットホーム延伸工事に先立ち緊急調査した。北地区では鎌倉時代前半の溝1条のみであるが、南地区では、いくつかの遺構がある。S K 2083は焼土がたまった土壇で奈良時代後半のもの。S K 2084は平安時代前半、S K 2082は鎌倉時代前半の土壇である。



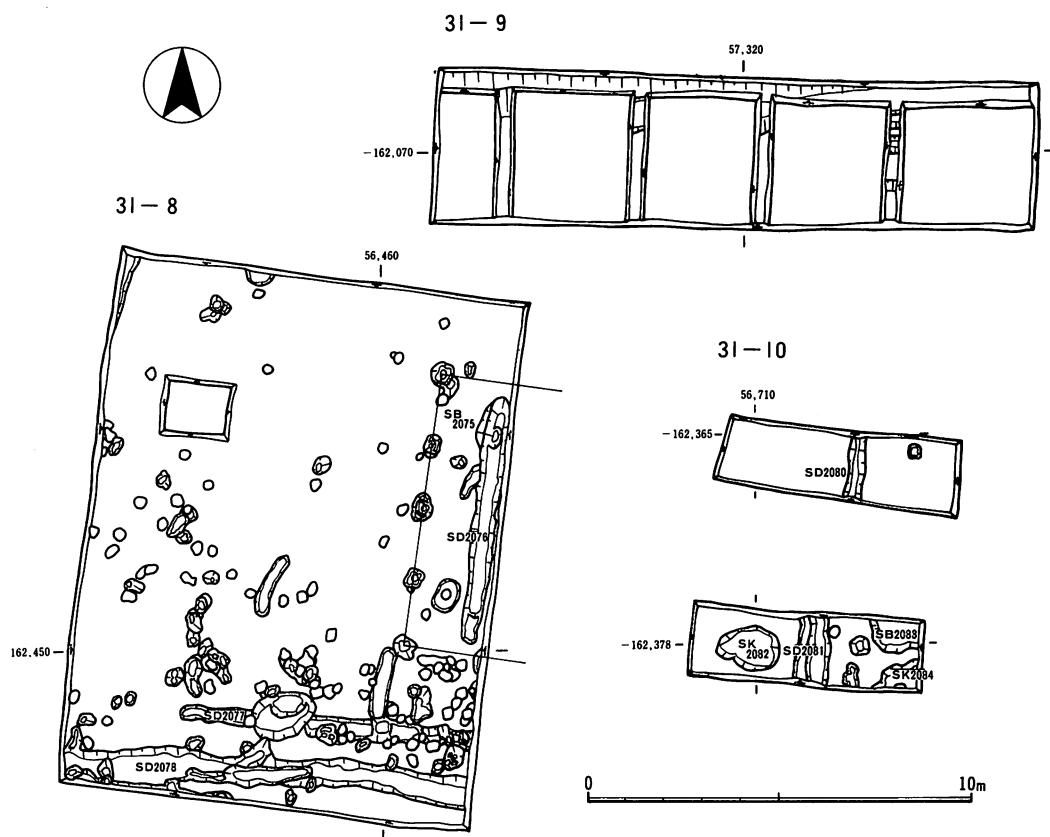
第16図 第31-6次 第31-7次遺構実測図 (1:200)

第31-11次調査 6ADT-J (澄野宅地)

宮城南端部にあたる牛葉集落南の申請地で実施した。申請地は現状が荒地で、周囲の畑より約50cm低い凹地となっている。この場所は地主によるとかつて、赤土取りをおこなった後、他の土で埋めもどしたと言っている。このため、遺構の保存状況確認を目的として、3m×2mのグリットを設定し、ユンボを使って調査したが表土下1mまで現代瓦、陶器片を含いた黒褐色土が埋まっていることが明らかになり、本調査は実施しなかった。

第31-12次調査 6ADT-K (宇田宅地)

第31-11次調査地の東に接する同様の凹地であったため、遺構の保存状況を確認したが、土取りにより完全に破壊されていることが明らかになり、本調査は実施しなかった。



第17図 第31-8次 第31-9次 第31-10次遺構実測図 (1:200)

VIII 調査事務所要覧

I 事業概要

- (1) 調査事業 17地区 8,981㎡
- ア 計画発掘調査事業 5地区 7,700㎡
- 第30次調査 中垣内地区 1,470㎡
- 第32次調査 塚山地区 1,150㎡
- 第33次調査 篠林地区 2,450㎡
- 第34次調査 西加座地区 1,080㎡
- 第35次調査 中町地区 1,550㎡
- イ 緊急発掘調査（個人住宅等新築）
- 第31—1次～12次調査 12地区 1,281㎡

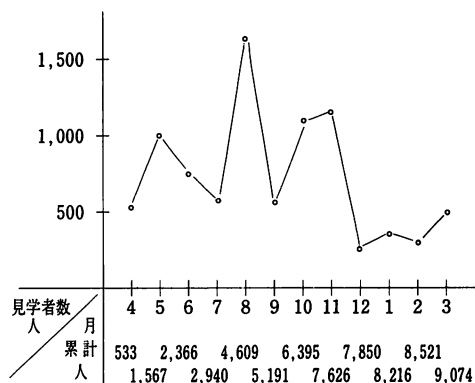
(2) 普及事業

- ア 現地説明会の開催
- (ア) 第30次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和55年 6月15日 午後2時
- 場所 明和町大字竹川字中垣内地内
- 調査面積 1,470㎡
- 調査期間 5月16日～7月28日
- 参加人員 約 220名
- (イ) 第32次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和55年 8月24日 午前10時30分
- 場所 明和町大字斎宮字塚山地内
- 調査面積 1,150㎡
- 調査期間 7月29日～9月18日
- 参加人員 約 150名
- (ウ) 第33次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和55年10月26日 午前10時30分
- 場所 明和町大字斎宮字篠林地内
- 調査面積 2,450㎡
- 調査期間 9月16日～12月7日
- 参加人員 約 200名
- (エ) 第34次発掘調査現地説明会
- 日時 昭和56年 1月25日 午後2時
- 場所 明和町大字斎宮字西加座地内
- 調査面積 1,080㎡
- 調査期間 12月10日～2月17日
- 参加人員 約 140名
- イ 調査報告会
- (ア) 7月18日 四日市々保々地区郷土史研究会
- (イ) 10月24日 四日市郷土史研究会

(ウ) 11月16日 三重の自然と文化財を守る会（松阪支部）

(エ) 12月4日 歴史研究会古代史部会

ウ 資料展示室見学者数



II 予算

斎宮跡保存対策費 66,766千円

(単位千円)

事業名	区分 歳出	財源内訳		備考
		県費	国費	
発掘調査費	31,333	15,833	15,500	発掘面積約 8,000㎡
史跡公有化補助金	31,500	31,500	—	公有面積約 1.6 ha
管理施設設置補助	100	100	—	案内板等の設置
維持管理	3,833	3,833	—	資料展示室整備文獻調査等
計	66,766	51,266	15,500	

III 組織規定

三重県教育委員会事務局組織規則抜粋

(昭和43年 4月1日
教育委員会規則 第6号)

最終改正 昭和54年 3月31日

教育委員会規則第6号

第三章 出先機関の組織

(教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等)

第12条 事務局の事務（県立学校関係事務を除く。）を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

3. 斎宮跡調査事務所の名称及び位置は、

次のとおりとする。

名 称	位 置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

(分掌事務)

第14条 3. 斎宮跡調査事務所においては、次に掲げる事務をつかさどる。

一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究にすること。

二、斎宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開展示にすること。

三、その他斎宮跡にすること。

附則 (昭和54年3月21日、教育委員会規則第6号抄)

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

Ⅳ 職 員

職	氏 名	備考
所 長	佐々木 宣 明	文化課主幹兼務
主 査	山 沢 義 貴	
事務職員	大 西 素 行	
〃	倉 田 直 純	
技術職員	吉 水 康 夫	
事務補助員	野 呂 美絵子	
〃	田 丸 恵美子	

Ⅴ そ の 他

(1) 斎宮跡調査指導委員

○設置要綱

1 設 置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期するため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員（以下「委員」という。）を置く。

2 所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項を指導・助言する。

(1) 当史跡の遺構の調査、検討に関すること。

(2) 当史跡の遺物の調査、検討に関すること。

(3) 当史跡の文献の調査、検討に関すること。

(4) 当史跡の環境整備の計画、検討に関すること。

(5) その他、当史跡の調査、保存のための必要事項に関すること。

3 定数等

(1) 委員の定数は、10人以内とする。

(2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学などに関し専門的知識を有する者のうちから三重県教育委員会教育長が委嘱する。

4 任 期

任務が完了するまでの間とする。

5 会 議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会教育長が招集する。

6 庶 務

会議の庶務は、三重県教育委員会事務局文化課において処理する。

7 その他

この要綱に定めるもののほか、委員に関し必要な事項は、三重県教育委員会教育長が定める。

附則

この要綱は、昭和54年10月19日から施行する。

○調査指導委員

氏 名	専 攻	現 職
福山 敏男	建築史	国文化財保護審議会専門委員
坪井 清足	考古学	奈良国立文化財研究所長
門脇 禎二	古代史	京都府立大学教授
檜崎 彰一	考古学 陶磁史	名古屋大学教授
服部 貞蔵	考古学	国文化財保護審議会委員
久徳 高文	国文学	嵯山女学園大学教授
渡辺 寛	古代史	皇学館大学助教授

○委員会の開催

1 第1回調査指導委員会

日時 昭和55年10月14日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

指導内容

昭和54年度発掘調査について

昭和55年度発掘調査について

公有化と当面の維持管理について

C地区の取り扱いについて

第33次調査現場視察

出席者 福山、坪井、門脇、檜崎、服部の
各委員

2 第2回調査指導委員会

日時 昭和56年2月16日

場所 あさあけ会館(津市)

指導内容

昭和55年度発掘調査について

昭和55年度事業について

昭和56年度事業計画について

史跡斎宮跡の将来構想について

出席者 福山、坪井、門脇、檜崎、服部、
久徳、渡辺の各委員

(2) 第9回大規模遺跡調査五県会議

日時 昭和55年10月23日、24日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

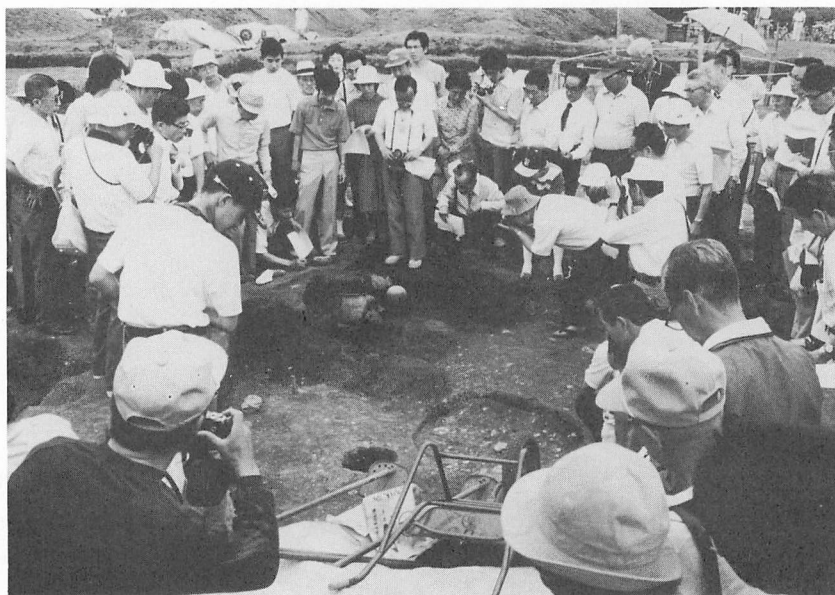
協議内容

発掘調査事業の概要について

特別史跡・史跡の保護管理について

国への要望事項について

出席者 文化庁、宮城・福井・広島・福岡
・三重の各県、多賀城跡調査研究
所、朝倉氏遺跡調査研究所、草戸
千軒町遺跡調査研究所、九州歴史
資料館、三重県斎宮跡調査事務所
25名



第30次現地説明会

昭和55年度所内日誌

自 昭和55年 4 月 1 日
至 昭和56年 3 月31日

月 日	内 容
4 月 1 日	県人事異動により新所長就任
5 月 6 日	第30次発掘調査開始（中垣内地区）
10日	第30—1次発掘調査開始（個人住宅）
17日	資料展示室見学者総数10,000人となる
20日	第31—1次発掘調査完了
20日	牛葉地区斎宮跡対策委員会……………牛葉公民館
21日	地方連絡会議……………県松阪庁舎
21日	第31—2次発掘調査開始（個人住宅）
23日	第31—2次発掘調査完了
24日	第31—3次発掘調査開始（個人住宅）
26日	斎宮跡地権者を守る会……………町中央公民館
26日	55年度文献調査打合せ会議
6 月 1 日	「斎宮跡について」山沢主査報告 松阪郷土会
4 日	第31—3次発掘調査完了
9 日	N H K教育テレビ“伊勢物語”放映（展示資料紹介）
9 日	第31—4次発掘調査開始（銀行店舗）
10日	斎宮跡地権者を守る会……………町中央公民館
15日	第30次発掘調査 現地説明会
7 月 1 日	資料展示室資料展示替え
10日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟役員会……………県議会
11日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟総会……………県議会
16日	第31—4次発掘調査完了
16日	牛葉地区斎宮跡対策委員会……………牛葉公民館
17日	C B C テレビ三重県民だより“王朝のロマンをたずねて（史跡斎宮跡）”放映
18日	「斎宮の歴史と調査」山沢主査報告 四日市々保々地区郷土史研究会
26日	名古屋テレビ 三重県民だより“王朝のロマンをたずねて（史跡斎宮跡）”放映
27日	中京テレビ 三重県民だより“王朝のロマンをたずねて（史跡斎宮跡）”放映
28日	第30次発掘調査完了
28日	第31—5次発掘調査開始（個人住宅）
29日	第32次発掘調査開始（塚山地区）
8 月 5 日	文化庁へ「斎宮跡の保存推進について」陳情（明和町・明和町議会）
11日	第31—5次発掘調査完了
13日	三重県教育長へ「斎宮跡の保存推進について」陳情（明和町・明和町議会）

月 日	内 容
8月24日	第32次発掘調査 現地説明会
9月12日	地元県議会議員と斎宮跡地権者を守る会との懇談会……町中央公民館
16日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟総会……県議会
16日	第33次発掘調査開始（篠林地区）
17日	第31—6次発掘調査開始（個人住宅）
18日	第32次発掘調査完了
24日	斎宮跡保存連絡会議（県文化課・県斎宮跡調査事務所・明和町）
27日	斎宮研究会……調査事務所
27日	55年度文献調査打合せ会議……調査事務所
30日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟視察……平城宮外
10月1日	地方財政審議会委員……現地視察
9日	牛葉地区斎宮跡対策委員会……牛葉公民館
10日	斎宮跡地権者を守る会……町中央公民館
14日	斎宮跡調査指導委員会……調査事務所
17日	第31—6次発掘調査完了
18日	県議会文教常任委員会視察……調査事務所
23日	資料展示室見学者総数15,000人となる
23日	大規模遺跡調査五県会議……調査事務所
24日	「国史跡斎宮跡の歴史と調査」山沢主査報告 四日市郷土史研究会
26日	第33次発掘調査 現地説明会
28日	第31—7次発掘調査開始（牧舎）
11月4日	NHKテレビ 今日のレポート
11日	牛葉地区第1、2組斎宮跡対策住民集会……牛葉公民館
12日	牛葉地区第3、4、5組斎宮跡対策住民集会……牛葉公民館
13日	牛葉地区第6、7、8組斎宮跡対策住民集会……牛葉公民館
16日	「斎宮跡の発掘調査」倉田主事報告 三重の文化財と自然を守る会（松阪支部）
17日	第31—7次発掘調査完了
22日	牛葉地区斎宮跡対策住民総会……牛葉公民館
24日	斎宮跡地権者を守る会……町中央公民館
12月4日	中町地区発掘調査打合せ会……町中央公民館
7日	第33次発掘調査完了
10日	第34次発掘調査開始（西加座地区）
10日	第35次発掘調査開始（中町トレンチ）
11日	第31—8次発掘調査開始（個人住宅）
13日	「斎宮跡発掘調査の現況について」山沢主査報告 歴史学研究会古代史部会
17日	斎宮跡地権者を守る会……町中央公民館

月 日	内 容
12月22日	第31―8次発掘調査完了
28日	三重テレビ“県政の窓（史跡斎宮跡）”放映
1月7日	第31―9次発掘調査開始（個人住宅）
7日	55年度文献調査打合せ会議……………調査事務所
8日	第31―4次関連調査打合せ会……………調査事務所
16日	第31―9次発掘調査完了
16日	第31―10次発掘調査開始（個人住宅）
20日	「史跡斎宮跡について」佐々木所長報告 ガモンの会
20日	第31―10次発掘調査完了
22日	斎宮跡環境整備検討会……………津市水産会館
25日	第34・35次発掘調査現地説明会
2月2日	斎宮跡環境整備検討会……………津市水産会館
4日	昭和56年度文化庁文化財関係予算聴取……………都道府県会館
9日	第31―11次、12次発掘調査
10日	中南勢地域振興協議会……………現地視察
12日	文化庁調査官……………現地視察
13日	斎宮跡調査指導委員会……………津市あさあけ会館
17日	第34次・35次発掘調査完了
23日	文化庁へ「史跡の保存管理について」陳情（明和町・明和町議会）
24日	CBCラジオ ばつぐんジョッキー放送
3月2日	牛葉地区斎宮跡対策委員会……………牛葉公民館
3日	斎宮跡地権者を守る会……………町中央公民館
9日	文化財研修生講義……………調査事務所
12日	県文化課・企画課・地方課へ「斎宮跡保存管理について」協議（明和町長）
13日	環境整備担当者会議……………滋賀県安土町
14日	三重県文化財保護審議会……………勤労者福祉会館
18日	文化庁へ「斎宮跡保存管理について」協議（調査事務所・明和町）
24日	三重県文化審議会……………洞津会館

掘立柱建物一覧表

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
第30次調査 (6 A B J-M・W・X)								
1616	4×2	E37°S	8.6	4.8	1.8 2.5	2.4	奈 良	桁行柱間不揃い 桁行柱間不揃い S B1616より新しい S B1620より新しい
1617	5×2	E 3°N	10.0	4.8	—	2.4	"	
1620	(3)×2	N37°E	—	4.8	2.1	2.4	"	
1621	(2)×2	N18°E	—	4.2	2.6	2.1	"	
1647	3×2	N41°E	6.3	4.2	2.1	2.1	"	
第32次調査 (6 A C E-D・E・F)								
1700	3×3	N3°W	5.5	5.6	1.8	1.8	奈 良	S X1699より新しい
408	3×2	E1°S	7.5	4.6	2.5	2.2	平安中	2 A トレンチで確認
1680	5×4	E5°S	10.8	7.8	2.1	2.1	"	4 面廂
1690	3×2	E5°S	6.2	4.2	2.1	2.1	"	S A1694より古い 緑釉皿片出土
1695	4×2	E4°S	8.3	4.0	2.1	2.0	"	
1713	(3)×2	E7°S	—	4.0	1.9	2.0	"	
1715	(3)×2	E5°S	—	4.2	2.0	2.1	"	
1720	5×(2)	N8°E	10.0	—	2.0	2.0	"	
1721	(2)×2	E3°S	—	4.2	—	2.1	"	
409	6×3	E12°S	13.3	6.8	2.22	2.15	平安後	2 面廂 廂柱間 梁 2.7m 間 2.5m
1705	3×(2)	N12°E	5.8	3.8	1.93	1.9	平安末	S B1723より新しい
1723	3×(2)	N15°E	6.5	—	2.17	—	"	
1724	4×(2)	N14°E	8.4	—	2.1	—	"	
第33次調査 (6 A D E-D)								
1751	3×2	N1°W	5.6	3.9	1.87	1.95	奈 良	S K1787より新しい
1752	4×2	N9°E	7.5	4.4	1.875	2.2	"	竪穴住居 S B1754より古い
1771	(4)×(2)	E9°S	—	—	2.4	2.2	"	総柱の可能性もある
1780	3×2	N3°E	5.4	3.4	1.8	1.7	"	
1753	3×2	N2°W	6.4	4.2	2.13	2.1	平安前	
1755	3×2	E4°N	5.8	4.3	1.93	2.15	平安中	
1784	2×2	E6°S	4.6	4.1	2.3	2.05	平安後	総柱
1792	(3)×2	E2°S	—	4.4	2.2	2.2	"	
1793	3×2	E1°S	5.9	3.7	1.97	1.85	"	
1794	3×2	E11°S	7.0	4.3	2.33	2.15	"	
1807	3×2	N2°E	6.4	4.6	2.13	2.3	"	
1815	3×2	E1°N	7.7	4.2	2.57	2.1	"	
1818	3×(2)	N2°E	5.3	—	1.77	2.1	平安末	総柱
1822	3×(2)	E5°N	6.9	—	2.3	2.0	"	
第33次調査 (6 A D E-L)								
1827	(2)×3	E8°S	—	5.4	1.97	1.8	平安末	総柱
1828	2×2	N6°E	4.1	4.1	2.05	2.05	"	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
1829	(3)×2	E5°S	—	4.3	2.3	2.15	平安末	
1830	(2)×(2)	(N10°E)	—	—	2.3	2.2	〃	

第34次調査 (6 A F K—F・G)

1436	(3)×2	E3°N	—	5.0	2.4	2.5	平安前	
1437	(4)×2	E3°N	(8.0)	4.8	2.0	2.4	〃	S B1438より新しい
1438	4×2	E4°N	11.5	4.2	3.0 2.5	2.1	〃	桁行柱間不揃い 東西廂 廂柱間 3.5m
1439	3×2	E2°N	8.1	5.0	2.7	2.5	〃	S B1853、S B1860より新しい
1440	(2)×2	E3°N	—	5.0	2.3	2.5	〃	S B1442より新しい
1442	(2)×2	E3°N	—	4.2	2.1	2.1	〃	
1843	(2)×(2)	(E2°S)	—	—	2.2	1.9	〃	
1848	(2)×2	E2°S	—	3.6	2.3	1.8	〃	
1853	(3)×2	E3°N	—	4.8	2.3	2.4	〃	
1854	(2)×2	E2°N	—	4.2	2.1	2.1	〃	
1860	(4)×3	E4°N	—	7.3	2.4	2.4	〃	南面廂 廂柱間 2.5m S B1853より新しい
1861	3×2	N3°W	5.4	3.6	1.8	1.8	〃	S D1857より新しい
1864	—×2	E3°N	—	3.8	—	1.9	〃	
1865	—×2	E3°N	—	4.6	—	2.3	〃	
1869	3×2	E2°N	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	S B1864より新しい
1435	(3)×3	E3°N	—	9.3	2.5	2.9	平安中	
1441	(2)×2	E3°N	—	5.0	2.4	2.5	〃	
1446	(2)×2	E2°N	—	3.8	1.8	1.9	〃	
1840	3×2	E3°N	7.5	5.0	2.5	2.5	〃	
1841	—×(2)	(E2°N)	—	—	—	2.4	〃	
1846	3×2	N2°W	6.0	3.6	2.0	1.8	〃	
1866	3×2	E5°N	5.7	3.8	1.9	1.9	〃	S B1867より新しい
1867	1×2	E3°N	5.2	5.4	5.2	2.7	〃	四脚門
1870	(3)×2	E5°N	—	5.0	2.3	2.5	〃	S B1864より新しい
1871	3×2	N2°W	5.4	3.8	1.8	1.9	〃	S B1870より新しい
1845	3×2	N2°E	5.1	3.8	1.7	1.9	平安後	S B1846より新しい
1872	—×2	E3°N	—	3.2	—	1.6	時期不明	

第35次調査 (6 A F E—L～P)

1882	3×—	E4°S	6.4	—	2.13	—	平安末	
1885	3×—	E3°N	6.5	—	2.17	—	〃	S D1889より古い
1886	3×—	E2°N	6.4	—	2.13	—	〃	S D1878より古い
1890	3×(2)	E3°N	6.4	—	2.13	—	〃	総柱(?) S D1878より新しい
1881	(2)×2	N0°E	—	4.2	1.8	2.1	室 町	

第35次調査 (6 A G G—A)

1919	(2)×2	E5°N	—	3.9	1.9	1.95	平安前	
1921	—×2	E2°S	—	3.8	—	1.9	〃	
1917	3×—	N5°W	5.0	—	1.67	—	平安中	S B1918より新しい

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
1918	－×2	E5°N	－	3.9	－	1.95	平安中	
1920	－×2	E2°N	－	3.8	－	1.9	〃	

第35次調査（6AGG－G）

1928	－×2	E1°N	－	4.1	－	2.05	平安前	
1929	(2)×2	E1°S	－	4.0	2.0	2.0	〃	S B1928より新しい
1930	(2)×2	E4°N	－	4.4	2.0	2.2	〃	S B1931より新しい
1931	(2)×2	E4°N	－	4.1	2.0	2.05	〃	
1934	(2)×－	(E3°N)	－	－	2.0	－	〃	
1923	(2)×－	(E1°S)	－	－	1.5	－	平安中	S B1924より新しい
1924	－×(2)	(E3°N)	－	－	－	2.2	〃	
1925	(3)×2	E2°S	－	3.6	1.8	1.8	〃	S B1924より新しい
1926	(2)×2	E0°	－	3.5	1.7	1.75	平安後	
1927	－×2	E1°N	－	3.5	－	1.75	〃	

第35次調査（6AGH－L）

1985	－×2	E2°N	－	4.6	－	2.3	平安前	
1990	(2)×2	E2°N	－	5.2	2.1	2.6	〃	
1994	－×2	E2°N	－	4.9	－	2.45	〃	
1974	(2)×2	E2°N	－	4.3	2.0	2.15	平安中	S B1977より新しい
1975	(3)×2	E0°	－	4.7	2.1	2.35	〃	
1977	(2)×2	E0°	－	4.4	2.0	2.2	〃	
1978	(2)×2	E1°N	－	3.5	1.8	1.75	〃	S B1980より新しい
1980	(2)×2	E1°N	－	3.9	1.7	1.95	〃	
1991	(2)×2	E2°N	－	4.9	2.4	2.45	〃	
1992	(2)×2	E1°N	－	5.0	2.4	2.5	〃	S B1991より新しい
1993	(2)×2	E2°N	－	4.0	2.3	2.0	〃	S B1992より新しい
1998	(2)×2	E3°N	－	3.6	2.0	1.8	〃	

第31－3次調査（6ABD－A）

2001	(2)×－	E35°N	－	－	1.80	－	奈 良	
------	-------	-------	---	---	------	---	-----	--

第31－4次調査（6ADQ－T）

2011	3×－	E4°N	6.40	－	2.13	－	平安中	
2012	4×－	E2°N	9.80	－	2.45	－	〃	
2014	－×2	N1°W	－	4.10	－	2.05	〃	
2015	－×2	E4°N	－	4.50	－	2.25	〃	
2017	－×2	E9°N	－	3.60	－	1.80	〃	
2019	－×2	E3°N	－	4.00	－	2.00	〃	
2020	(4)×2	E3°N	－	3.60	2.17	1.80	平安後	
2010	4×(2)	E2°N	9.70	－	2.43	2.10	平安末	
2013	4×(2)	E1°S	8.60	－	2.15	2.10	〃	
2018	(3)×2	N9°W	(5.4)	4.00	(1.80)	2.00	〃	
2021	(2)×(2)	E5°N	－	－	2.50	2.60	時期不明	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
第31－5次調査（6ACC－G）								
2046	(3)×(2)	E2°S	—	—	1.90	2.10	奈 良	
2045	—×(2)	E10°S	—	—	—	2.10	時期不明	
2047	(2)×—	E0°N	—	—	2.20	—	〃	
第31－6次調査（6ABO－X）								
2050	3×2	E27°S	7.30	4.50	2.43	2.25	奈 良	
2051	(2)×2	N40°E	—	3.20	1.60	1.60	〃	
2055	3×—	N35°E	6.20	—	2.07	—	〃	
2060	3×—	N33°E	6.70	—	2.23	—	〃	
第31－7次調査（6AGI－L）								
2065	—×2	E1°N	—	4.00	—	2.00	平安前	
2066	—×(2)	E2°N	—	4.60	—	2.30	〃	
2067	—×(2)	E2°N	—	4.80	—	2.40	〃	
2070	—×(2)	E6°S	—	—	—	1.60	〃	
第31－8次調査（6ACN－G）								
2075	4×(2)	N8°E	7.20	—	1.80	2.10	平安後	

竪穴住居一覧表

S B	規 模 (m)	長軸方向	深さ (cm)	柱 穴	かまど	時 期	備 考
第30次調査 (6ABJ-M・W・X)							
1615	(8.0)×4.9	E44°N	15	○	東南壁	飛 鳥	一部に周溝
1619	— × —	N35°E	20			奈 良	
1640	4.3 × —	N40°E	40			〃	
1643	— × 3.8	E33°S	35			〃	S B1645、S B1644より新しい
1644	4.0 × —	N36°W	25			〃	S B1645より新しい
1645	3.6×2.9	E21°S	50			〃	
1650	4.2 × —	E21°S	30			〃	S D1649より古い
1652	3.8×3.5	E18°S	15			〃	
1653	5.8(直径)	—	10	○		弥生中期	円形
1654	4.4×3.6	N31°E	15			奈 良	一部に周溝
1655	4.3×3.5	N19°E	25			〃	S B1654より新しい
1665	3.5×2.8	E20°S	30	○	北 壁	〃	
1666	4.0×3.5	E30°S	35			〃	S D1663より古い
1670	4.7×3.7	E40°S	15		北 壁	〃	S D1668より古い
1672	4.0×3.7	E30°S	30			〃	

S B	規模 (m)	長軸方向	深さ (cm)	柱 穴	かまど	時 期	備 考
-----	--------	------	---------	-----	-----	-----	-----

第32次調査 (6ACE-D・E・F)

1725	4.2×3.7	N20°E	28		北 壁	奈 良	東壁頂蔵穴
------	---------	-------	----	--	-----	-----	-------

第33次調査 (6ADE-D)

1750	—	—	10		東 壁	奈 良	
1754	2.8×2.5	N1°W	20		北 壁	〃	S B1752より新しい
1757	5.1×3.4	E4°N	15		東 壁	〃	S B1758、S B1760より古い
1758	—×5.9	(N)4°W	20		〃	〃	S B1759の拡張か?
1759	—×4.2	(N)4°W	25		〃	〃	土製支脚
1760	6.8×6.0	N17°W	27	○	北 壁	〃	一部周溝
1761	—	(N)3°W	13		〃	〃	S B1760より新しい
1762	4.2×3.8	E12°N	8	○	東 壁	〃	貼り床
1763	—	—	10		〃	〃	南壁のみ確認
1765	5.1×4.5	N7°W	9		東 壁	〃	
1781	3.9×3.5	N4°W	30		〃	〃	
1782	—	—	38		北 壁	〃	S B1781より新しい
1785	5.7×4.8	N2°W	37	○	東 壁	〃	S B1782より新しい
1790	3.3×3.2	N0°	29		〃	〃	北壁を拡張、支柱石
1796	4.5×3.2	E5°S	35		北 壁	〃	支柱石
1801	3.8×3.1	N1°E	20		東 壁	〃	
1809	4.6×3.8	E2°S	25			平安後	
1816	5.9 ×—	(E)11°N	12			奈 良	S D1813より古い
1817	4.4 ×—	(E)12°N	27			〃	

第31-3次調査 (6ABD-A)

2005	3.5 ×—	N40°E	28			奈 良	
------	--------	-------	----	--	--	-----	--

第31-5次調査 (6ACC-G)

2044	4.4×3.5	N5°E	10				
------	---------	------	----	--	--	--	--

三重県遺跡標示一覧

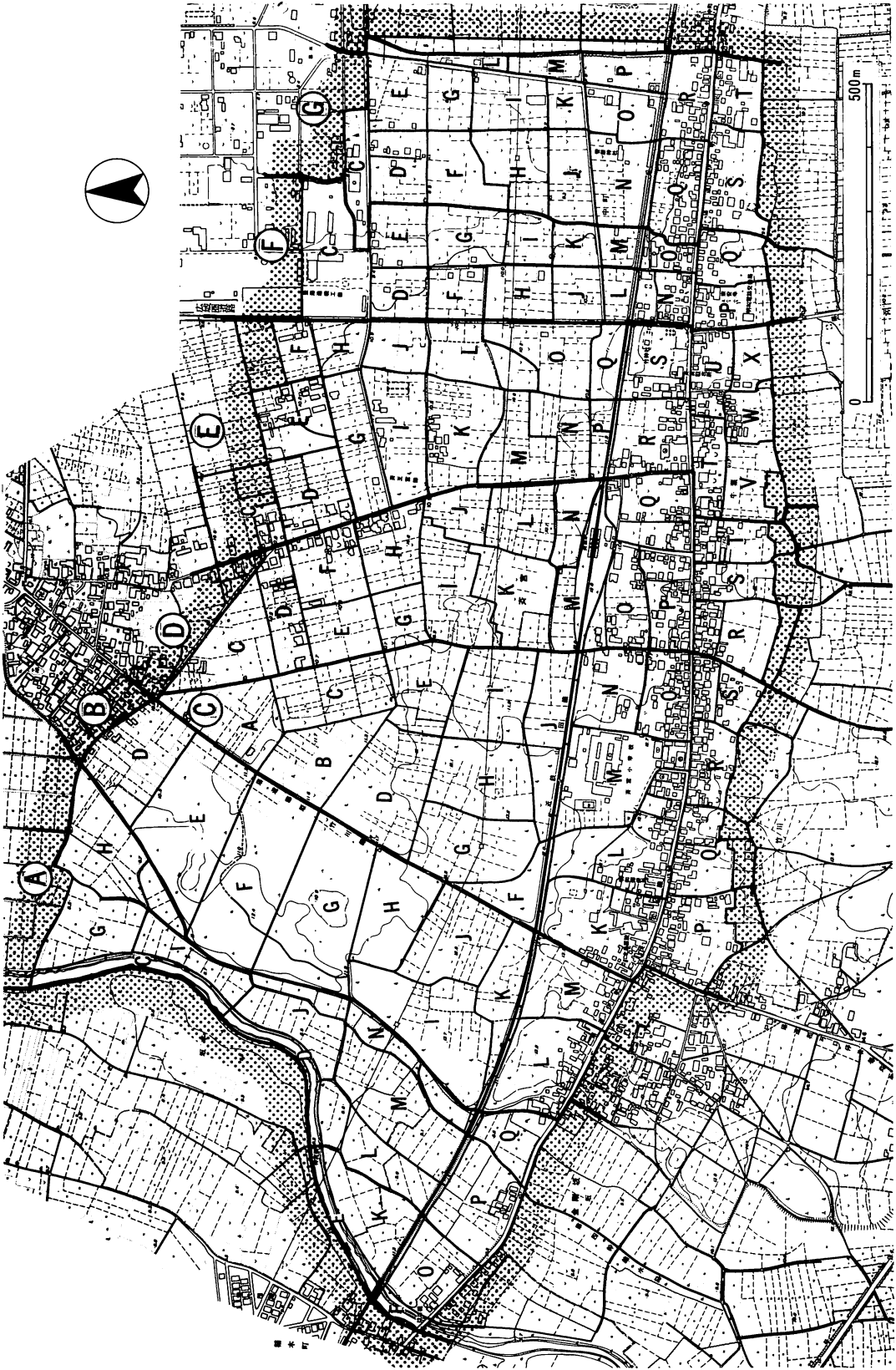
時 代		種 別		と 地 区	
0		A 国 郡 衙		K 北 勢	T 伊 勢 城
1	先 縄 文	B 伊 勢 寺		L 中 勢 墳	U 志 摩 熊 野 砦
2	縄 文	C 志 摩 熊 野		M 南 勢	V 伊 賀 館
3	弥 生	D 伊 賀 院		N 志 摩	W 記 念 物
4	古 墳	E 北 勢 集		O 熊 野 墓	X 交 通
5	飛 鳥	F 中 勢 落		P 伊 賀	Y
6	奈 良	G 南 勢		Q 伊 勢	Z そ の 他
7	平 安	H 志 摩		R 志 摩 熊 野	
8	鎌 倉	I 熊 野		S 伊 賀	
9	室 町 以 降	J 伊 賀			

斎宮跡発掘次数一覧表

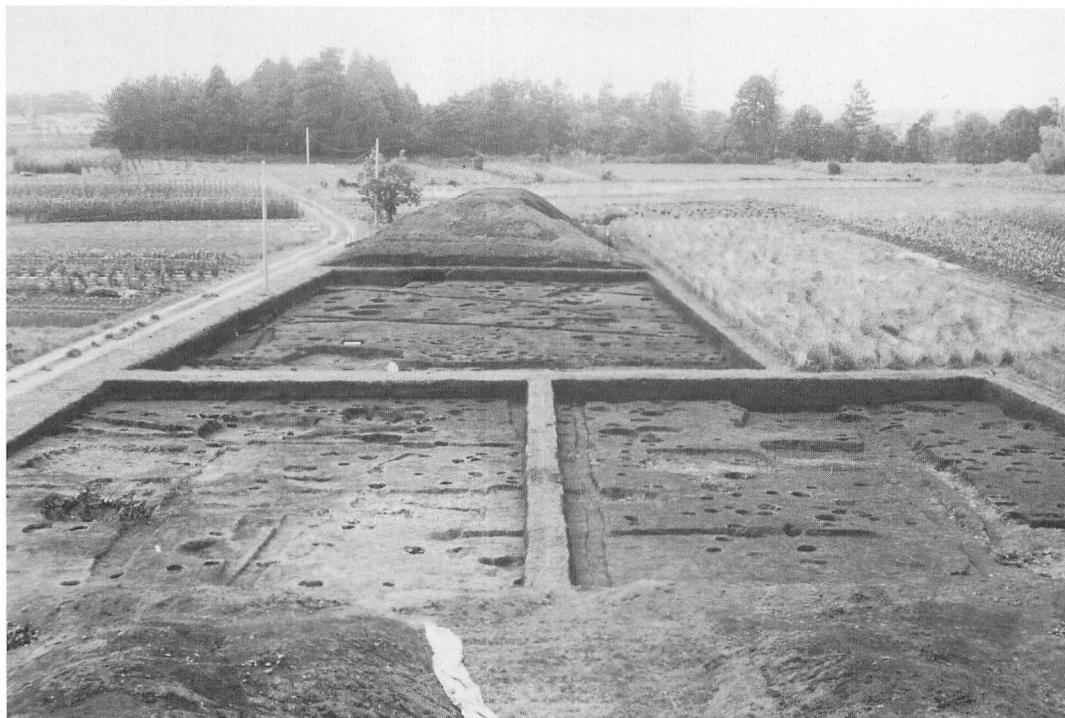
次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
1	45	試掘	13-4	51	楽 殿2916～2917（松井宅）
2	46	古里A地区	13-5	"	御 館2974-1（川本宅）
3	"	" B地区	13-6	"	中垣内 375-1（南宅）
4	47	" C地区	13-7	"	東裏 328（小川宅）
5	48	" D地区	13-8	"	西加座2771-1（細井繁久宅）
6-1	"	Aトレンチ	13-9	"	" 2773（細井国太郎宅）
6-2	"	Bトレンチ	13-10	"	東裏363-1、362-1（児島宅）
6-3	"	Cトレンチ	13-11	"	西加座2681-1（浮田宅）
6-4	"	Dトレンチ	13-12	"	" 2721-3、2724-2（森川宅）
6-5	"	Eトレンチ	13-13	"	東前沖2506-2（宮下宅）
7	49	古里E地区	14-1	52	2 Eトレンチ
8-1	"	Fトレンチ	14-2	"	2 Fトレンチ
8-2	"	Gトレンチ	14-3	"	2 Gトレンチ
8-3	"	Hトレンチ	14-4	"	2 Hトレンチ
8-4	"	Iトレンチ	14-5	"	2 Iトレンチ
8-5	"	Jトレンチ	15	"	斎宮小学校
8-6	"	Kトレンチ	16-1	"	竹川町道A
8-7	"	Lトレンチ	16-2	"	" B
8-8	"	Mトレンチ	16-3	"	" C
8-9	"	Nトレンチ	16-4	"	" D
8-10	"	Oトレンチ	16-5	"	" E
8-11	"	Pトレンチ	16-6	"	" F
9-1	50	Qトレンチ	17-1	"	竹神社社務所
9-2	"	Rトレンチ	17-2	"	竹神社防火用水
9-3	"	Sトレンチ	17-3	"	西加座2721-6（西沢宅）
9-4	"	Tトレンチ	17-4	"	楽 殿2894-1（中川宅）
9-5	"	Uトレンチ	17-5	"	" 2895-1（西口宅）
9-6	"	Vトレンチ	17-6	"	出在家3237-3（吉川宅）
9-7	"	Wトレンチ	17-7	"	" 3237-1（里中宅）
9-8	"	Xトレンチ	17-8	"	楽 殿2894-1（西村宅）
9-9	"	Yトレンチ	17-9	"	東海造機
9-10	"	Zトレンチ	18	53	6 A E L-E・I（下園）
10	"	広域圏道路	19	"	6 A E N-M・N・O（御館）
11-1	"	西加座2661-1（山中宅）	20	"	6 A E O-I・J（柳原）
11-2	"	" 2681-1（山名宅）	21-1	"	6 A G N-B（鍛冶山、中山宅）
11-3	"	東前沖2483-2（前田宅）	21-2	"	6 A F I-D（西加座2711-2、2717-4他山路宅）
11-4	"	下 園2926-9（吉木宅）	21-3	"	6 A F D-D（西前沖2649-1大西宅）
12-1	51	2 A トレンチ	21-4	"	6 A F H-F（西加座2678、2679-3森下宅）
12-2	"	2 B トレンチ	21-5	"	6 A G D-K（東前沖、渡部宅）
12-3	"	2 C トレンチ	21-6	"	6 A C A-T（古里3269-2、中西宅）
12-4	"	2 D トレンチ	21-7	"	6 A F E-F（東前沖2631-1鈴木宅）
13-1	"	東加座2436-7（浜口宅）	21-8	"	6 A E G-A（楽殿2909-3大西宅）
13-2	"	" 2436-4（中村宅）	21-9	"	6 A E D-R（篠林3218-3宇田宅）
13-3	"	古 里3283（村上宅）	22-1	"	6 A G U

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
22-2	53	6 A G U	27	54	6 A C G - S ・ T (東裏)
22-3	"	6 A G W	28	"	6 A E O - D (柳原)
23	54	6 A E L - B (下園)	29	"	6 A F I、6 A F L、6 A F K、6 A F M、6 A G J
24	"	6 A G F - D (西加座)	30	55	6 A B J - M ・ X ・ W(中垣内)
25-1	"	6 A D P - K(牛葉3029-1、三重土地ホーム)	31-1	"	6 A D O - M(内山3038-13、岩見宅)
25-2	"	6 A C A - Y (古里3270、脇田宅)	31-2	"	6 A C P - I (南裏227-2、鈴木宅)
25-3	"	6 A D D - F(篠林3139-3、池田宅)	31-3	"	6 A B D - A(古里588-4、北藪宅)
25-4	"	6 A E R - H(牛葉3014、牛葉公民館)	31-4	"	6 A D Q - T(牛葉3018-2、百五銀行)
25-5	"	6 A G N - H(鍛冶山2392、丸山宅)	31-5	"	6 A C C - G(塚山3338-3、水谷宅)
25-6	"	6 A F H - A(西加座2675-5、谷口宅)	31-6	"	6 A B O - X(古里576-1、池田宅)
25-7	"	6 A E K - V(下園2926-10、奥田宅)	31-7	"	6 A G I - L(東加座2427-1、竹内牧舎)
25-8	"	6 A F C - D(西前沖2064-5、山本宅)	31-8	"	6 A C N - G(広頭3388-1、5、8、9森宅)
25-9	"	6 A C N - C(広頭3387-1、北出宅)	31-9	"	6 A G D - L(北野2487-1、中川宅)
25-10	"	6 A E V - A(鈴池339-1、永島宅)	31-10	"	6 A D M - O(内山3043-3、斎宮駅)
25-11	"	6 A C F - B(東裏364-1、沢宅)	31-11	"	6 A D T - I(木葉山304-2、澄野宅)
25-12	"	6 A E E - Y(楽殿2892-3、山本宅)	31-12	"	6 A D T - J(木葉山304-7、宇田宅)
25-13	"	6 A F J - E(西加座2766-1、山内宅)	32	"	6 A C E - D ・ E ・ F (塚山)
26-1	"	6 A F R (中西)	33	"	6 A D E - C ・ D他 (篠林)
26-2	"	6 A E X ~ 6 A C Q(鈴池、木葉山、南裏)	34	"	6 A F K - F ・ G ・ H(西加座)
26-3	"	6 A E V ・ W ・ X (鈴池)	35	"	6 A P E 他 (西前沖)
26-4	"	6 A C R (木葉山・南裏)			

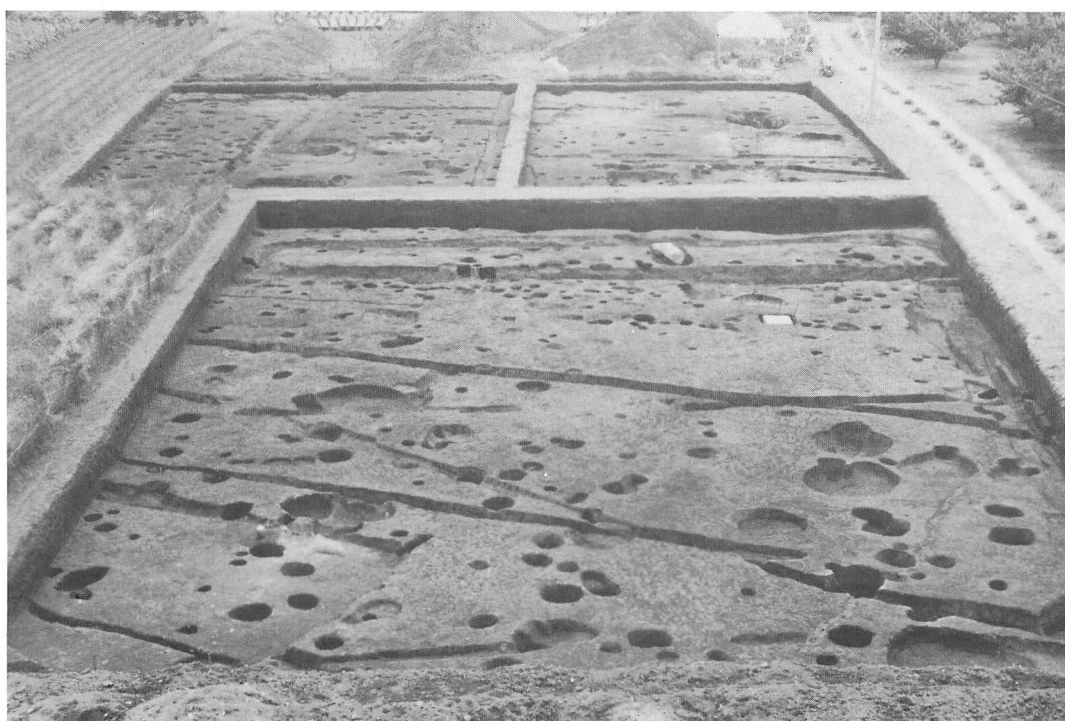
示 表 区 迹 宫 裔



版 図



全 景 (東から)



全 景 (西から)



S B1615 (南西から)



S B1665 (南から)



S B1666 (南から)



S B1616 (東南から)



全 景 （北から）



S B1690 （東から）



S X 1699 (北西から)



SB 1725 (南から)



S K 1730 (北から)



S D 1736~1738 S K 1732 (東から)



6 ADE-D区全 景 (西から)



6 ADE-D区北東部 (西から)



6 ADE-D区 SB1753 SB1752 SB1754 (南から)



6 ADE-D区 SX1819 (北から)



6 A D E - L 区全景 (南から)



6 A D F - L 区全景 (南から)



全 景 （東から）



S B1439 （東から）



S B 1860 (西から)



S K 1445遺物出土状況 (北から)



SB1840 (東から)



SB1866 SB1867 (南から)



S B1869 S B1870 S B1871 (北から)



S B1845 (南から)



6 A F E 地区 (東から)



6 A F E 地区 SK1876 SE1880 SK1879 (東から)



6 A G D - D ・ G 地区 SD1910 SD1911 (西から)



6 A G G - A ・ G 地区 (北から)



6 A G G - G 地区 (北から)



6 A G H - D 地区 S D 1935 S D 1936 (北から)



6AGH-C地区 SD1940 SK1947 (西から)



6AGI-A地区 SD1940 (西から)



6AGH-L地区 SK1970 SK1972 SK1976 (北から)



6AGH-L地区 SB1991 (北から)



第31-1次調査 (北から)



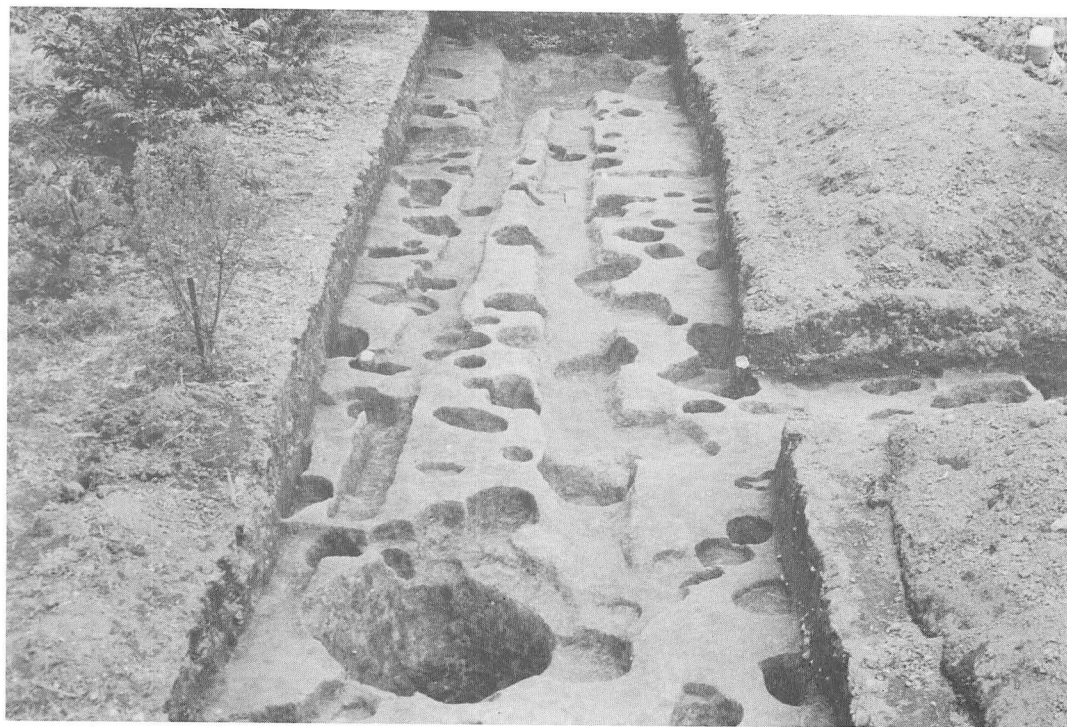
第31-2次調査 (東から)



第31-3次調査 (西から)



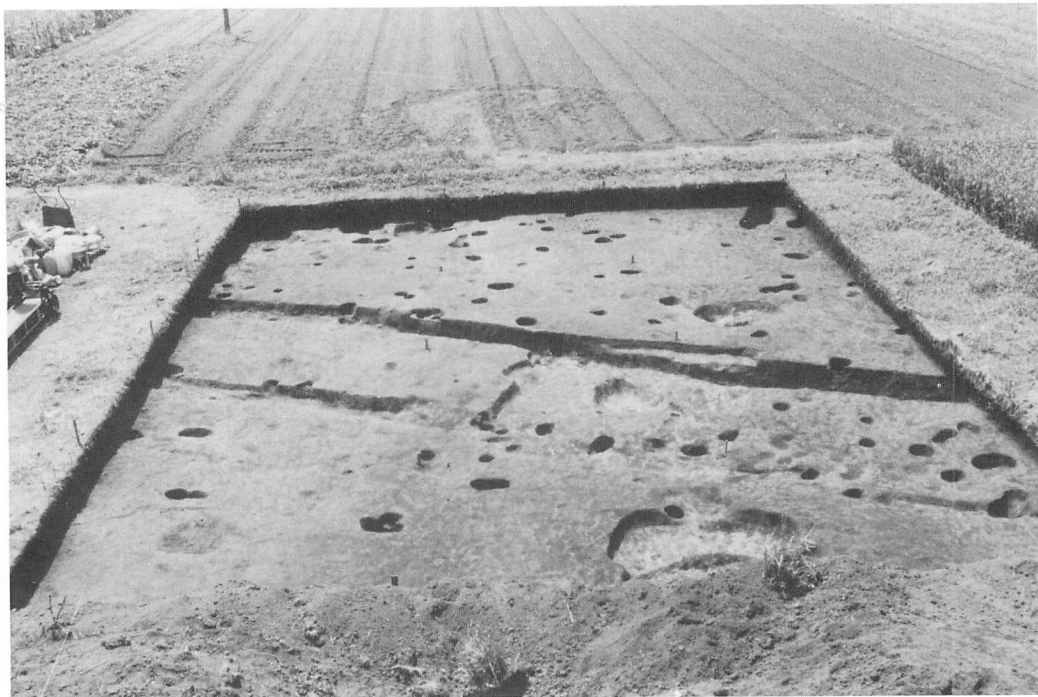
第31-4次調査 (北から)



第31—4次調査（西から）



第31—4次調査（北から）



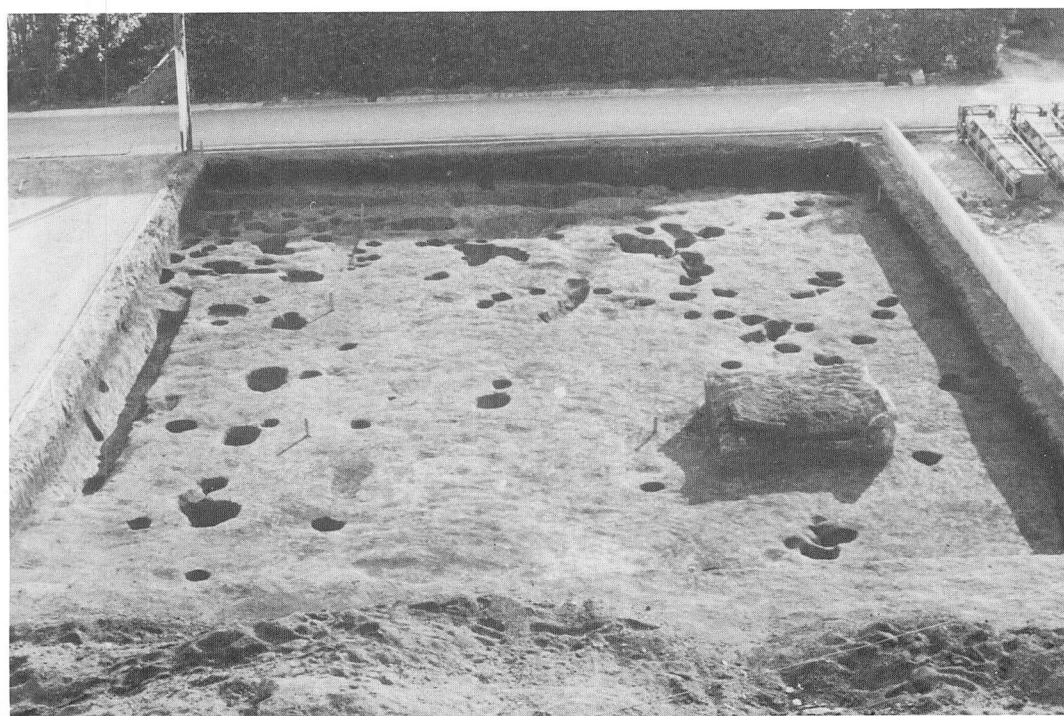
第31—5次調査（北から）



第31—6次調査（北から）



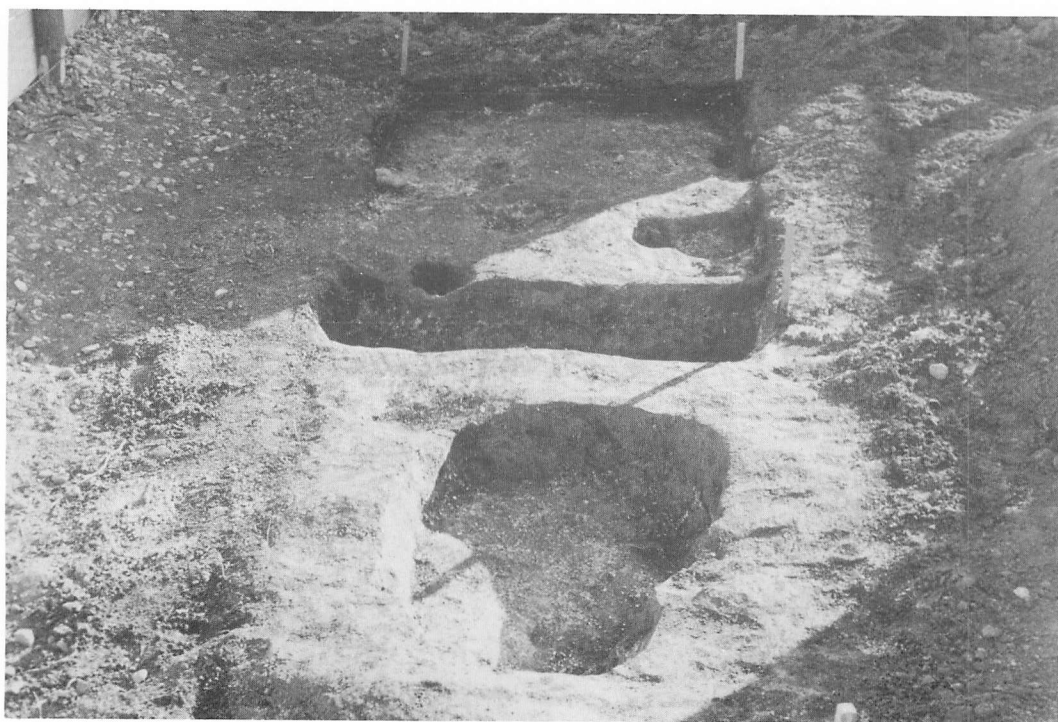
第31—7次調査（北から）



第31—8次調査（北から）



第31—9次調査 (東から)



第31—10次調査 (西から)

三重県齋宮跡調査事務所年報1980

史 跡 齋 宮 跡

——発掘調査概報——

昭和 56 年 3 月 31 日

編集発行 三重県齋宮跡調査事務所

印 刷 光 出 版 印 刷
